

Paradigms of the Mongol Study : Symmetric marriage alliance in the marriage relationships of Chinggis Khan's family

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇野, 伸浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003522

1 モンゴル研究のパラダイム

チンギス・カン家の通婚関係にみられる対称的婚姻縁組

宇 野 伸 浩*

- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1. はじめに | 4.2. 通婚パターンの分析と解釈 |
| 2. チンギス・カン一族の通婚関係と姻族 | 4.3. 小結 |
| 3. オイラト族クドカ・ベキ家とチンギス・カン家の通婚関係 | 5. チンギス・カン家の縁組システムの特徴 |
| 3.1. 史料 | 5.1. なぜ「父方交叉イトコ婚」として解釈できないのか |
| 3.2. 通婚パターンの分析と解釈 | 5.2. 「女性の交換」の担い手となる集団 |
| 3.3. 小結 | 5.3. チンギス・カン家の縁組システムにおける母方の親族関係 |
| 4. ウンギラト族アルチ・ノヤン家とチンギス・カン家の通婚関係 | 6. 結論 |
| 4.1. 史料 | |

1. はじめに

チンギス・カン以来、モンゴル帝国の支配者であるカンの婚姻は、代々一夫多妻婚である。カンには、様々な部族から娶ったカトン qatun (后) が複数おり、その数は普通4人であった。チンギス・カン家と通婚関係のある様々な部族の中で、とくに姻族として名高かったのは、チンギス・カンの第1カトン、ボルテ Börte の出身部族であるウンギラト Unggirad/Qunggirad 族である¹⁾。そのウンギラト族の中でも、とくにボルテの弟の家系であるアルチ・ノヤン Alči Noyan 家が姻族として重要であり、5世代にもわたってカン家と密接な通婚関係を持っていた。その通婚関係は相互的なものであり、アルチ・ノヤン家からチンギス・カン家へ婚出するだけでなく、チンギス・カン家からアルチ・ノヤン家へ婚出した例も数多くあり、カン家出身の女を娶った男は、「グレゲン güregen/küregen (婿)」と呼ばれていた。

一方、ウンギラト族に次いで有名な姻族はオイラト Oyirad 族である。とくにオイラト族の部族長の家系であるクドカ・ベキ Quduqa Beki 家が姻族として重要であり、

* 広島修道大学商学部，国立民族学博物館共同研究員

Key words : marriage, cousin marriage, Chingis Khan, Oyirad
キーワード：通婚関係，交叉イトコ婚，チンギス・カン，オイラト

ウングラト族の場合と同様、通婚は相互的であり、クドカ・ベキ家からチンギス・カン家へ婚出するとともに、チンギス・カン家からもクドカ・ベキ家へ婚出しており、カン家出身の女を娶った者はやはり「グレゲン」と呼ばれていた。クドカ・ベキ家は、とくにチンギス・カン家の末子の系統と密接な通婚関係を持ち、4世代にわたり相互の通婚を行っていた。

さて、従来、チンギス・カン家の通婚関係については、主に歴史学の分野から研究されてきた。主要な研究としては、村上正二氏によるチンギス・カンの祖先の通婚関係に関する論文（村上 1964）、岡田英弘氏によるチンギス・カン家とウングラト族、ならびにオイラト族との通婚関係に言及した論文（岡田 1974; 1985）、志茂碩敏氏によるイルカン国におけるイルカン一族と諸部族との通婚関係に関する論文（志茂 1983; 1995）、蕭啓慶氏による元朝帝室と高麗王家との通婚関係に関する論文（蕭 1983）、白翠琴氏によるチンギス・カン家とオイラト族との通婚関係に関する論文（白 1984）がある。それ以外にも、那珂通世（那珂 1907: 325-330; 1915: 10-12, 48-49）、佐口透（佐口 1943: 994-996）、クリーブス（Cleaves 1950; 1951）、アンビス（Hambis 1954）、藤島建樹（藤島 1968: 783）、村上正二（村上 1972: 386-395）、ペリオ（Pelliot 1973: 237-288）、杉山正明（杉山 1992: 100-101, 153-154）の諸氏が、史料の訳注・論文・著書の中で、チンギス・カン家の通婚関係について言及している。これらの研究の蓄積により、誰と誰が結婚したかなどの基本的な事実、ほぼ網羅的に明らかにされている。しかし、その錯綜した通婚関係がどのような婚姻システムにもとづいているかという点については、まだほとんど解明されていない。その分析には、人類学の縁組理論の考え方を導入することが有効であるが、一方人類学にとっても、150年余りにわたる連続的な通婚の実例であるチンギス・カン家の通婚関係は、従来の婚姻縁組（marriage alliance）の理論を再検討するために格好の分析対象である²⁾。

周知のように人類学の分野では、レヴィ＝ストロース『親族の基本構造』（レヴィ＝ストロース 1977; 1978）、リーチ「母方交又イトコ婚の構造的意味」（リーチ 1974: 106-177）、ニーダム『構造と感情』（ニーダム 1977）を初めとする数多くの研究があり、東南アジア、南アジア、オセアニアなどの社会の婚姻システム、婚姻縁組（marriage alliance）が分析され、とくに1950-60年代には、理論的研究が集中的に行なわれた。その成果として得られた典型的なモデルは、規定的な婚姻ルールとして「母方交又イトコ婚」が実行された結果、姻戚関係に特定のパターンが生じ、複数のグループ間に「非対称的婚姻縁組（asymmetric marriage alliance）」が成立するというものである。しかし、その後の研究で、現実の婚姻縁組はそれほど単純でないことがわか

り、激しい論争の原因になった（キージング 1982: 149-150）。その点について、後年レヴィ＝ストロース自身も、彼のモデルは、実際の社会で機能しているシステムを表わしているというより、むしろ人々の意識の中にある理想的モデルを表わしたものであったことを認めている（レヴィ＝ストロース・エリボン 1991: 189-190）。

近年、「非対称的婚姻縁組」の研究に大きな進展があり、マッキノン¹はインドネシアのタニンバル諸島の調査により、ビーティ²はインドネシアのニマス島の調査により、規定的な婚姻ルールがないにもかかわらず、非対称的婚姻縁組が成立している事例があることを明らかにした（Mckinnon 1991; Beatty 1992）。とくに、マッキノンの議論は興味深く、タニンバル諸島の非対称的婚姻縁組では、一つの縁組システムが世代を越えて継承維持されていくために、夫と妻の系譜関係で表せば様々なタイプの婚姻が行われているという。従って、「母方交叉イトコ婚」が規定的なルールとして繰り返された結果、非対称的婚姻縁組が成立すると考えた従来の研究は、根本から再考をせまられているといえよう。

さて、本稿でとりあげるモンゴル帝国のチンギス・カン家の縁組システムは、「非対称的婚姻縁組」ではなく、2集団間の「対称的婚姻縁組（symmetric marriage alliance）」である。レヴィ＝ストロースの表現を用いれば、2集団間の交換であるという点で「限定交換」に近い。そして、従来の婚姻モデルを適用すれば、一見「父方交叉イトコ婚」（図1）が繰り返されているように見える。しかしよく検討してみると、マッキノンが「非対称的婚姻縁組」について主張したのと同様に、この「対称的婚姻縁組」の場合も、夫と妻の系譜関係にもとづく「父方交叉イトコ婚」という（規定的であれ選好的であれ）婚姻ルールによってこの縁組システムを説明することは、無理であることがわかった。むしろ有効な方法は、2集団間で、どのようなパターンにもとづいて女性を互酬的に交換したかに注目することである。なぜ「父方交叉イトコ婚」という婚姻ルールでこの縁組システム全体を説明することに無理があるかについては後述する。

ところで、縁組システムを分析する上で「女性の交換」という考え方を重視し体系化を押し進めたのはレヴィ＝ストロースであるが、現在ではこの考え方には否定的な見解が多い。リーチ³は、レヴィ＝ストロースのように「女性の交換」だけを重視するのではなく、花婿側が花嫁の代償として与える婚資や労働、さらには無形の地位や名誉なども含めた交換の束を論ずべきだと主張した（リーチ 1974:

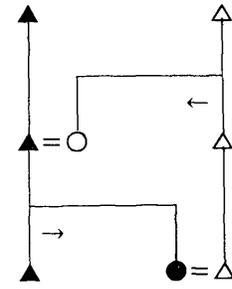


図1 父方交叉イトコ婚

156-157)。それ以来、リーチの考え方が主流となり、上述したマッキノンやビーティの非対称的婚姻縁組の研究も、縁組システムのメカニズムを解明する上で、「女性の交換」ではなく「女性と婚資の交換」に注目している。

モンゴル帝国のチンギス・カン家の場合、確かに婚姻による女性の交換には、財・地位・名誉・奉仕などの交換が伴う。しかし、チンギス・カン家と姻族との縁組システムは、「非対称的婚姻縁組」ではなく「対称的婚姻縁組」であり、2集団間で女性の直接のギブ・アンド・テイクが成り立っている。すなわち、上の世代の一人の女性の婚入は、次世代の一人の女性の婚出によって報いられ、それによって2集団間の対称的な交換は世代を越えて連続していくのである。この「女性の交換」には様々な他の交換財・地位などが伴うとしても、ギブ・アンド・テイクの交換の軸となっているものは、あくまで「女性の交換」である。チンギス・カン家の男が妻をめとったお返しに、次世代である自分の娘を嫁がせるという行為があるからこそ、2集団間の交換が世代を越えて連続していくのである。

従って、チンギス・カン家と姻族との対称的婚姻縁組システムのメカニズムを解明するためには、「婚姻ルール」や「女性と婚資の交換」ではなく、2集団間の「女性の交換」を分析することが必要であると思う。すなわち、対称的婚姻縁組システムが世代を越えて継承維持されていくためにどのような原則にもとづいて女性が2集団間で交換されたのかを明らかにすることが、チンギス・カン家の縁組システムの解明につながると思う。

筆者はこのような考えに立ち、すでに、モンゴル帝国のチンギス・カン家の通婚関係の一部を分析し、また同じ方法を10世紀に建国した遊牧国家遼朝にも適用して皇族耶律家の通婚関係を分析し、合計3本の論文を発表した(宇野 1993; 1995; 1997a)。このうち、チンギス・カン家の通婚関係を分析したのは(宇野 1993)である。ただ、これは歴史論文として発表したため、通婚関係の政治的背景の分析が中心であり、なぜ従来の「父方交叉イトコ婚」のモデルではこの縁組システムを解明できないのか、なぜ「女性の交換」に注目する方法が有効であるのかについては、十分に議論しなかった。また、紙数の制限のためにモンゴル帝国の初期の通婚関係の分析にとどまっている。

そこで本稿では、なぜ「父方交叉イトコ婚」のモデルを適用することが適当でないかを、とくにチンギス・カン家とオイラト族クドカ・ベキ家との通婚関係の事例によって詳しく議論したい。また、チンギス・カン家とオイラト族クドカ・ベキ家およびウングラト族アルチ・ノヤン家との相互の通婚関係の全貌をできるだけ明らかにし、

通婚関係から「女性の交換」のパターンを抽出する方法が効果的であることを具体的に示したうえで、この縁組システムのメカニズムを解明してみたい。

なお、以下の論には、モンゴル帝国初期の通婚関係を論じた上述の別稿（宇野 1993）と部分的に重複する箇所もあるが、本稿が別稿と異なり人類学を対象とする論集に掲載されることを考慮し、またできるだけ全貌を明らかにするという目的もあるため、重複を厭わず論じることとする。

2. チンギス・カン一族の通婚関係と姻族

まず、チンギス・カン以前の通婚関係も含め、チンギス・カン一族の通婚関係の概略を述べておこう。

チンギス・カンの一族は、タイチウト Taiči'ud 族、サルジウト Salji'ud 族、マンガト Mangqud 族などと系譜関係があり、これらの諸族は、アラン・コア Alan Qo'a という伝説上の女性を共通の祖先としていた。アラン・コアの子孫であるこれらの人々は、互いに「兄弟 aqa degü」と呼び合い、彼らの間では、結婚が禁止されていたため、彼らは一つの外婚集団を形成していたと考えられている。一方、これに対応する集団が、ウングラト諸族であり、ウングラト族、イキレス Ikires 族、オルクヌト Olqunu'ud 族、コロラス Qorolas 族は、伝説上の黄金の壺を共通の祖先としており、やはり一つの外婚集団を形成していたと考えられる（福島 1985）。

チンギス・カン一族とウングラト諸族の間には、チンギス・カン以前から密接な通婚関係があった。チンギス・カンから3世代上にあたるカブル・カン Qabul Qan は、ウングラト族からコア・クルグ Quwā qūlūqū という名の妻を娶った（JT/TS 1518: fol. 55b）。また、カブル・カン家には、コロラス族出身の嫁がいたという。さらに、チンギス・カンの父イエスゲイ Yesügei は、オルクヌト族からホエルン Hö'elün を娶

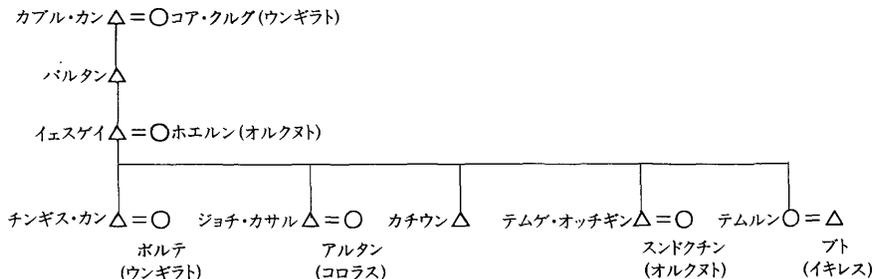


図2 チンギス・カンの世代とウングラト諸族の通婚関係

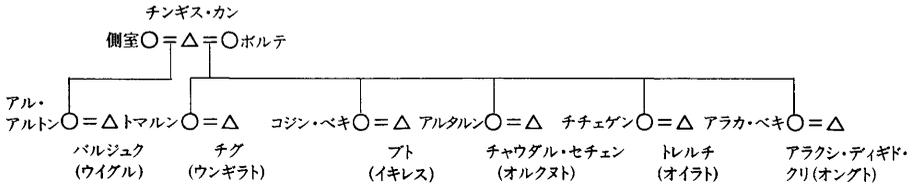


図3 チンギス・カンの娘たちの婚姻

った。チンギス・カンの世代では、チンギス・カン自身がウングラト族のボルテ Börte を娶り、弟のジョチ・カサル Jöçi-qasar はコロラス族のアルタン・カトン (Altan Qatun < Altān Khātūn) を娶り、末弟のテムゲ・オッチギン Temüge-otčigin はオルクスト族のスンドクチン Sundqjīn を娶り、妹のテムルン Temülün はイキレス族のブト Butu に嫁いだ (JT/TS 1518: fol. 59b-60a) (図2)。

このようなウングラト諸族との通婚関係は、チンギス・カンの子供の世代にも継続された。チンギス・カンと彼の第一カトンのボルテとの間に生まれた5人の娘のうち、トマルン、コジン・ベキ、アルタルンは、それぞれ、ウングラト族のチグ Čigü (アルチ・ノヤンの息子)、イキレス族のブト Butu、オルクスト族のチャウダル・セチェン (Čaudar sečen < Jäüdar Sājān) に嫁いだ (JT/TS 1518: fol. 65a) (図3)。コロラス族には、チンギス・カンの娘は嫁がなかったが、モンケ・カンがコロラス族出身のカトンを娶るなど、コロラス族との間にも通婚関係が続いていた。これらのウングラト諸族との通婚関係は、互いに娘を与え合う相互的な通婚であったことは共通しているが、上述したように、その中で、特定の交換のパターンに沿った通婚が行なわれたことがはっきりわかるのは、ウングラト族のアルチ・ノヤン家との通婚関係だけである。

一方、チンギス・カンの時代から、ウングラト諸族以外の集団とも新たな通婚関係が生まれた。チンギス・カンの5人の娘のうち残りのチチェゲン Čičegen³⁾、アラカ・ベキ Alaqa-beki が嫁いだのは、オイラト族のトレルチ Törelči⁴⁾ (クドカ・ベキの息子)、オングト王アラクシ・ディギド・クリ Alaquš-digit-quri である。また、側室から生まれたチンギス・カンの娘アル・アルトン Al-altun は、ウイグル王バルジュク Bārjūq に嫁つぐはずであったが、延期されるうちにアル・アルトンが死去し実現しなかった (佐口 1943: 994-995)。

この3集団との通婚はその後も継続した。ただし、ウイグル王家、オングト王家は、ほとんどチンギス・カン家から婚出するだけの一方的な通婚であり⁵⁾、相互的な通婚が行なわれたのは、この3集団の中ではオイラト族のクドカ・ベキ家だけであった⁶⁾。

そのほか、チンギス・カン時代に通婚関係をもった部族として、バヤウト **Baya'ud** 族、カルルク族があり、チンギス・カンの娘がこれらの部族にも嫁いだという。おそらく、第1カトンのボルテ以外から生まれた娘であろう。一方、チンギス・カン家に嫁いでカトンになった女性のうちケレイト **Kereyid** 族出身のカトンが有名である。それ以外にも数多くの部族からカトンや側室としてチンギス・カン家に婚入した女性があり、その出身部族を列挙すればほとんどあらゆる部族に及ぶ。しかし、ケレイト族にしるそれ以外の部族にしる、姻族として連続的な通婚関係を維持していたわけではないので、本稿では分析の対象としない⁷⁾。

以上、ウングラト族は、チンギス・カン以前からチンギス・カン一族と通婚関係のあったウングラト諸族（ウングラト族、イキレス族、オルクスト族、コロラス族）の一つであること、また、オイラト族は、ウイグル族、オングト族とともに、チンギス・カンの時代から、チンギス・カン家と通婚関係が生じた部族であること、そして、錯綜するチンギス・カン家の通婚関係の中で、通婚関係に特定の交換のパターンが生じるのは、オイラト族のクドカ・ベキ家、とウングラト族のアルチ・ノヤン家だけであることを述べた。

では、なぜウングラトのアルチ・ノヤン家、およびオイラトのクドカ・ベキ家との通婚関係にだけ、特定の交換のパターンが見られるのであろうか。この2家系の特徴は何であらうか。

13-14世紀のモンゴル史は、帝位継承をめぐるチンギス・カン家内の骨肉の争いの連続であった。その政争の中で、潜在的ライバルである親族より、むしろ確実な味方となったのは姻族である。そして、姻族の中でもとくにチンギス・カン家内の争いに深く関わってきたのが、このアルチ・ノヤン家とクドカ・ベキ家であった。この両家は、それぞれチンギス・カン家内の異なる一派と結びつき、代々密接な通婚関係を持つとともに、帝位継承をめぐる戦争に、有力な味方として参加してきたのである。従って、このような政治的な背景を持つアルチ・ノヤン家、クドカ・ベキ家との通婚関係にのみ特定の交換のパターンが現われるということは、この通婚関係が極めて政治的な意味合の強い政略結婚であったことを意味している。

もう一つ重要な点として、この2家系とチンギス・カン家との間で結ばれた婚姻の全てが、特定の交換のパターンに沿っているわけではなく、それから外れる婚姻もある。なぜそのようなことが起こるかといえば、それは、交換のパターンに沿った婚姻が、各世代で一組結ばれさえすれば、通婚関係が連続することが保証されるので、他の婚姻は必ずしもそのパターンに沿う必要がなくなるからである⁸⁾。つまり、特定の

パターンの婚姻が繰り返されるといっても、それは2家系間の縁組システムが世代を越えて維持されるために必要とされるにすぎず、特定のパターンの婚姻が「婚姻ルール」としてチンギス・カン家の婚姻を拘束していたわけではないのである。

ところで、チンギス・カン家の通婚関係に見られる「女性の交換」というのは、単に研究者が通婚関係を分析した結果見いだされるものではなく、当事者であるモンゴル人自身が、「交換」ということをはっきり意識していたことを示す例を次にあげておきたい。

チンギス・カンは、即位する以前に、ケレイト族のオン・カンとの絆を深めるため、姻戚関係を結ぼうとしたことがあった。そのとき計画された縁組は、チンギス・カンが、自分の長子ジョチ *Joči* のために、オン・カンの娘のチャウル・ベキ *Ča'ur-beki* を求め、代わりに自分の娘のコジン・ベキ *Qojin-beki* を、オン・カンの孫に与えるというものであった。この計画は結局失敗に終わり、それがオン・カンとの対立が始まる一つのきっかけとなるのであるが、この事件は『元朝秘史』に次のように記されている。

「親しい上に重ねて親しくなろう」とチンギス・カンは考えて、ジョチのためにセングム *Senggüm* の妹チャウル・ベキを求めるとき、「セングムの子トサカ *Tusaqa*⁹⁾ に、我らのコジン・ベキを交換して araljın 与えよう」といって求めると、その時セングムは自分を尊大に考えて言うには、「我らの一族 *uruy* は彼らの所に行けば戸口に立って、いつも奥座に面するのである。彼らの一族が我らの所に来れば奥座に座り戸口に面している」といって、自分を尊大に考え我らを見下して話し、チャウル・ベキを与えず、喜ぶことをしなかった。その言葉に、チンギス・カンは、オン・カンと赤子のようなセングム二人に対して、心の中で好意を持たなくなった。(『元朝秘史』165節)

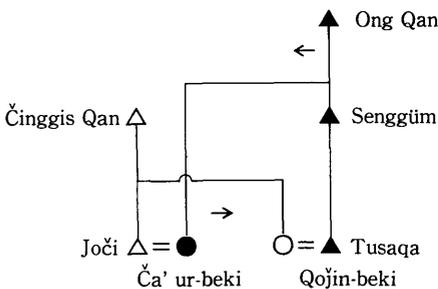


図4 チンギス・カン家とオン・カン家の通婚関係

下線部に「交換して araljın」とあるように、このとき同時に計画された相互の2組の婚姻は、オン・カン家のチャウル

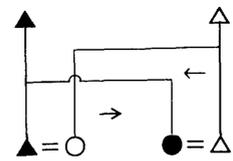


図5 姉妹交換婚

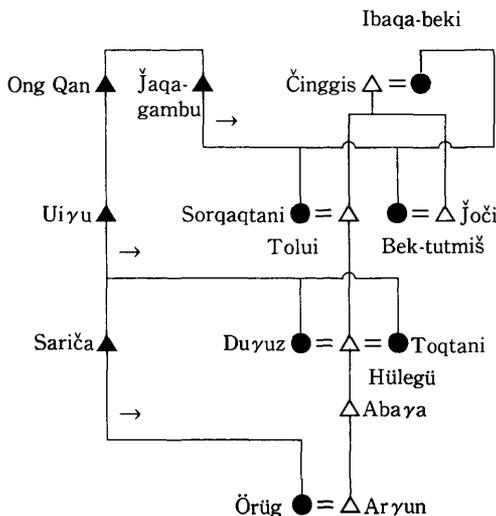


図6 チンギス・カン家とオン・カン一族の通婚関係

・ベキとチンギス・カン家のコジン・ベキとを「交換」する縁組と考えられていたことがわかる。

この2組の婚姻の組合せを図示してみると、図4のようになる。このときのように、同時に相互の婚姻を結ぶケースとしては、図5のような「姉妹交換婚」を行なうのが典型的な例であり、それは相互の連続的な通婚関係のスタートとなることが多い。この場合も、形はやや異なるが、やはりチンギス・カン家とオン・カン家の間に、通婚関係をスタートさせようとした縁組と考えることができるだろう¹⁰⁾。

この政略結婚の計画が失敗に終わった後、オン・カンとチンギス・カンの間に戦いが起こり、オン・カンが敗れる。その後、オン・カン一族とチンギス・カン家の間に姻戚関係が生じるが、それはもはや相互的なものではなく、図6のように、一方的にチンギス・カン家のメンバーがオン・カン一族の娘を娶っただけであり、連続的な通婚関係として展開することはなかった。そのとき嫁いだオン・カンの一族出身のカトンの中には、トルイの第1カトンのソルカクタニ・ベキのように、政権を左右するほどの影響力を持った者もいたけれども、オン・カン一族が、チンギス・カン家の姻族として勢力を持つことはなかった。

結局、オン・カン一族との女性の交換は、上述の実現しなかった縁組の計画だけであったが、この例から、当時のモンゴル人に、政略結婚として、互いに女性を「交換する」という考え方があったことをはっきり知ることができるのである。

3. オイラト族クドカ・ベキ家とチンギス・カン家の通婚関係

オイラト族は、もともと、南シベリアの一角であるモンゴル高原西北のフスグル湖西岸のシシト河流域に居住していた部族であり、「森林の民（ホイン・イルゲン）」と呼ばれた諸部族のうちの一つであり、牧畜を基本的な生業とする部族であった（岡田 1981: 155; 宇野 1984: 176, 181）。

チンギス・カンの時代、オイラト族の部族長であったクドカ・ベキは、初めはチンギス・カンの敵側についていたが、1208年チンギス・カンに帰順した。そのとき、チンギス・カン軍の先導役を果たし、その功が認められたらしく、クドカ・ベキは、オイラト族の統治を委ねられ、オイラト族4千戸の千戸長となり、クドカ・ベキの息子トレルチは、チンギス・カンの娘のチチェゲンを妻として与えられた。これが、チンギス・カン家の女性がクドカ・ベキ家へ婚出した最初の例である。このトレルチとチチェゲンの結婚以降、両家の間でどのような通婚が行なわれたかをみていきたい。

3.1. 史料

まず、諸史料から通婚に関する箇所をピックアップし、それにアルファベットをふって列挙する。この史料A～Hにもとづいて、次の議論を進めたい。

A 彼らは、チンギス・カンの時代に幾らか敵対したけれども、年代記に出てきたように、よい具合にイルになり服従した。チンギス・カンは、彼らと通婚関係を結んで、娘を与えたり貰ったりし、彼らとアンダ・クダの (andā qūdāi) 関係にあった¹¹⁾。

その時代に、この部族の王でありリーダーであったのはクドカ・ベキ (Quduqa Beki < Qūtūqa Bikī) であった。彼にはイナルチ (Inalči < Īnālji) とトレルチ (Törelči < Tūrālji)¹²⁾ という2人の息子がおり、オグル・クイミッシ (Oyul Quimiš < Oghül Qūmish) という名の一人の娘がいた¹³⁾。彼女をモンケ・カンが娶った。その前にチンギス・カンが彼女を娶ろうと心に思っていたが、そうならなかった。彼女は、クビライ・カン (Qubilai Qan < Qūbilāi Khān) とフレグ・カン (Hülegü Qan < Hülākū Khān) の兄嫁 (bergen < bārikān) であったにもかかわらず、彼らを息子と呼んでいて、彼らは彼女を大変尊重していたと言われている。チンギス・カンは自分の娘のチチェゲン (Čičegen < Jijākān) をこのトレルチ・グレゲン (Törelči

Güregen<Türälji Kürkän) に与えていた。彼女から3人の息子が生まれ、一人は名をブカ・テムル (Buqa-temür<Büqā-timür), もう一人はブルトア (Burto'a<Bürtüā) といった。このブルトアの気質には弱いところがあり、よくそれが言われた。3番目は名をパルス・ブカ (Bars-buqa<Bärs-büqā) といった。

また彼女から2人の娘が生まれた。一人をエルチクミシ・カトン (El-čiqmiš Qatun<İljīqmīsh Khātūn) といい、アリク・ブケ (Ariq-böke<Ariq-büqā) に与えた。彼女は彼の大カトンであり、彼は彼女を大変愛した。彼女は非常に身長が高かった。彼女から息子はいなかった。もう一人をオルガナ・カトン (Oryana Qatun<Ūrqana Khātūn)¹⁴⁾ といい、彼女をチャガタイ (Čayatai<Jaghatāi) の孫でありモエトゥケン (Mö'etüken<Müätükän) の息子であるカラ・フレグ (Qara-hülegü<Qarā-hüläkü) に与えた。ムバーラク・シャー (Mubārakshāh) はこのオルガナ・カトンからであった。オゴデイ (Ögödei<Ūktāi) は彼女を大変愛し、彼女をオルガナ・ベリ (Oryana beri<Ūrqana Bārī) ——すなわち嫁——と呼んでいた。彼女は長い間、チャガタイのウルスを統治していた。前述の3人の息子から生まれた息子達は以下のごとくである。

ブカ・テムルの息子たち。

彼には一人の息子がいて、その名をチョバン (Čoban<Jūban) といい、彼にノムガン (Nomuyan<Nümūghān) という名のアリク・ブケの娘を与えた。彼には2人の娘がいて、(一人は) フレグ・カンのカトンであったオルジェイ・カトン (Öljei Qatun<Ūljāi Khātūn) である。もう一人の名は知られていないが、彼女をバトゥ (Batu<Bätü) の一族のトコカン (Toqoqan<Tüqān) に与えた。モンケ・テムル (Möngke-temür<Munkkü-timür) は彼女から生まれた。次のような別の伝承もある。このブカ・テムルには4人の姉妹がいた。一人はクイク・カトン (Kübek Qatun<Kübäk Khātūn)¹⁵⁾ といい、フレグ・カンの第1夫人であり、ジュムクル (Jumqur<Jūmqūr) の母親であった。もう一人はオルガナ・カトンといい、ムバーラク・シャーの母親であった。もう一人は、バトゥ・ウルス (Ulūs-i Bätü) の王のモンケ・テムル (Möngke-temür<Munkkü-timür) の母親であった。4番目は、フレグ・カンのオルジェイ・カトンであった。この伝承が正しい¹⁶⁾。(中略)

クドカ・ベキの他の息子イナルチ (Inalči<Īnālji) について、以下のような話がある。バトゥは、自分の姉妹の一人を彼に与えた。彼女の名はクлуй・エゲチ (Qului Egeči<Qūlūi Īkāji) といい、彼女からウルド (Uldu<Ūldū) という名の息子が生まれた。(中略)

タラカイ・グレゲン (Taraqai Güregen < Tarqāi Kūrkān) は、チャキル・グレゲン (Čakir Güregen < Jāqir Kūrkān) の息子であり、チャキル・グレゲンはブカ・テムルの息子であった。彼と彼の息子のタラカイ・グレゲンはオイラトの千戸のアミールであった。タラカイはフレグ・カンの娘のモングルゲン (Möngülügen < Munkülükān) と結婚していたが、彼女が亡くなると、彼女の代わりにモンケ・テムル (Möngke-temür < Munkkū-tīmūr) の娘のアラ・クトルグ (Araqutluq < Arā-qutlūq) を娶った。(中略) フレグ・カンの年上の息子のジュムクル (Jumqur < Jümghur) の1番上のカトンであったノルン・カトン (Nölün Qatun < Nülün Khātūn) も、ブカ・テムルの娘であり、チャキル・グレゲンの姉妹であった。彼にはもう一人娘がおり、名をオルジェテイ (Öljetei < Uljitāi) といい、モンケ・テムルのカトンであった。彼女から2人の娘が生まれた。一人は上述のアラ・クトルグである。(『集史』部族篇オイラト族, JT/A1: 222-229)

B アリク・ブケ (Ariq-böke < Arīgh-būqā) のカトンたちのなかの一人は、オイラト族出身のエルチクミシ (El-čiqmiš < İljiqmish) であり、もう一人は、ナイマン族のグループであるクチュグル (Küçügür < Kūjūkūr) 部族出身のクトクナ・カトン (Qutquna Qatun < Qütqūna Khātūn) であった。彼には彼女から二人の娘がおり、年上の方はカルカン・アカ (Qaluqan-aqa < Khālūqān-aqā) といい、彼女をバヤウト出身のナヤクナ・グレゲン (Nayaqina Güregen < Nāyāqna Kūrkān) に与えた。カルカンの娘をメリク・テムル (Melik-temür < Meliktemür) が求めた。彼女の名はネグデル (Negüder < Neküdar) である。彼女はソルカクタニ・ベキ (Sorqaqtanibeki < Syürqūqtanī-bikī) の牧地・住地に住んでいる。彼女からカムタイ (Qamtai < Qāmtai) という名の娘が生まれたが、彼女はまだ結婚していない。もう一人の娘は、名をノムガン (Nomuyan < Nümūghān) といい、彼女をオイラト族出身のチョバン・グレゲン (Čoban Güregen < Jūbān Kūrkān) に与えた。(『集史』クビライ・カン紀, JT/TS 1518: fol. 213b; JT/BL 16688: fol. 5a; Boyle 1971: 311)

C トコカン (Toqoqan < Tūqān) の3番目の息子 トデ・モンケ (Tödemöngke < Tūdā-munkkū) 。彼の母親とモンケ・テムル (Möngke-temür < Munkkū-tīmūr) の母親は、コチュ・カトン (Köcü Qatun < Kūjū Khātūn) であり、彼女はオルジェイ・カトン (Öljei Qatun < Üljai Khātūn) とブカ・テムル (Buqa-temür < Būqā-tīmūr) の姉妹であり、オイラト族出身であった。(『集史』ジョチ・カン紀,

JT/TS 1518: fol. 159a)

D リンクン・カトン (Lingqun Qatun < Linkqūn Khātūn) が亡くなったとき、彼女からエル・テムル (El-temür < Īltemür) という名の娘が残された。彼女をバルス・ブカ・グレゲン (Bars-buqa Güregen < Bārs-būqā Kūrkān) に与えた。(中略) メリク・テムルには、もう一人他のカトンがいる。名前をボレ (Böre < Būre) といい、ジャサウル (jāsāul) の大アミールであったドルバン族出身のシレギ (Širegi < Shireki) の娘である。彼には、彼女からの2人の息子がいる。一人はオイラタイ (Oiratai < Ūirātāi) といい父親に仕えている。もう一人は名をマフムード (Maḥmūd) といい、やはりそこにいる。また彼 (メリク・テムル) には、彼女からの2人の娘がいる。一人は名をエメゲン (Emegen < Emekān) といい、彼女をオイラト出身のトレルチ・グレゲン (Törelči Kürgen < Tūrālji Kūrkān) の曾孫であり、バルス・ブカの孫であるトク・テムル・グレゲン (Toq-temür Güregen < Tūqtemür Kūrkān) に与えた。もう一人の娘は名をイル・クトルグ (Il-qutluy < Īl-qutluḡ) といい、彼女をスルドス出身のコベク (Köbek < Kūbek) に与えた。(中略) メリク・テムルの息子達は以下の4人である。ミンカン (Mingqan < Minkqān), アジギ (Ajiyi < Ajighi), イエスン・トア (Yesün-to'a < Īsün-tūā), バリタイ (Baritai < Bārītāi)。彼らはオイラト出身のバルス・ブカの娘のエメゲン・カトン (Emegen Qatun < Emekān Khātūn) から生まれた。(『集史』クビライ・カン紀, JT/TS 1518: fol. 214a; Boyle 1971: 312–313)

E 彼 (モンケ・カン) にはもう一人の大カトンがいる。(彼女の) 名をオグル・トトミシ (Oyul-tutmiš < Ūqūl-tütmiš) といい、彼女はオイラト (Ūirāt) の骨の出身で、クドカ・ベキ (Quduqa Beki¹⁷⁾) の子孫 (ürūḡh) であり、彼らはオルジェイ・カトン (Öljei Qatun < Ūljāi Khātūn) の一族¹⁸⁾ である。このカトンは非常に専横的であった。彼女は最初、トルイ・カンの婚約者であったので、そのために、自分の夫の兄弟であるクビライ・カン、フレグ・カンを「息子」と呼んでいた。彼らは彼女を恐れた。(『集史』モンケ・カン紀, JT/TS 1518: fol. 185b; JT/BL 16688: fol. 32b; Boyle 1971: 198)

F もう一人のカトンのクイク・カトン (Küik Qatun < Kūik Khātūn) は、オイラト族の王の骨 (血筋) の出身であり、トレルチ・グレゲン (Törelči

Güregen<Türälji Kürkän) の娘で、チンギス・カンの娘のチチェゲン (Čičegen<Jijikän) から生まれた。オルジェイ・カトン (Öljei Qatun<Üljai Khätün) も彼の娘であるが、他の母親からである。彼女 (クイク・カトン) を、モンゴル地方で、他のカトンよりも早く娶った。

もう一人のカトンのクトイ・カトン (Qutui Qatun<Qütüi Khätün) は、ウンギラト (Unggirad<Qunqürät) 族の王の骨 (血筋) 出身の——の娘である。クイク・カトンがモンゴル地方で亡くなったとき、彼女を娶り、彼女 (クイク・カトン) の牧地 (yürt) を彼女 (クトイ・カトン) に授けた。

もう一人のカトンのオルジェイ・カトンは、オイラト族の王族の骨 (血筋) の出身であるトレルチ・グレゲンの娘であり、彼女をモンゴル地方で娶った。(『集史』フレグ・カン紀, JT/A3: 8)

G (フレグの) 三番目の娘のモングルゲン (Möngülügen<Munkulükän) は、オルジェイ・カトン (Öljei Qatun<Üljai Khätün) から生まれた。彼女を、オイラト族出身のブカ・テムル Buqa-temür の息子チャキル・グレゲン (Čakir Güregen<Jäqir Kürkän) に与えた。このブカ・テムルは、フレグ・カンと一緒にやって来たのであり、オルジェイ・カトンの兄弟である。彼は、クイク・カトン (Küik Qatun<Küik Khätün) の母親であり、——の娘であるチチェゲン (Čičegen<Jijikän) から生まれた。チャキル・グレゲンの息子タルカイ・グレゲン (Tarqai Güregen<Tarqai Kürkän) は、モンケ・テムル (Möngke-temür<Munkkütimür) の婿であり、逃げてシリアへ行った。(『集史』フレグ・カン紀, JT/A3: 15-16)

H オルガナ (Oryana<Hurghana) には2人の姉妹がおり、一人はオルジェイ・カトン (Öljei Qatun<Üljai Khätün) で、フレグ・カンが娶った。もう一人は、ベキ (Beki<Biki) といい、サイン・カン・バトゥ (Šain Khāni Bātū) のハトンであった。(『ワッサーフ史』, TW/TS 3040: fol. 9b)

3.2. 通婚パターンの分析と解釈

上記の史料に記されている2家系間の通婚関係を分析し図示したものが、図7～図16である。一見して、2集団間の相互的な女性の交換であることがうかがわれるが、この図にしたがって、個々の婚姻がどのような交換のパターンにそっているかを逐一

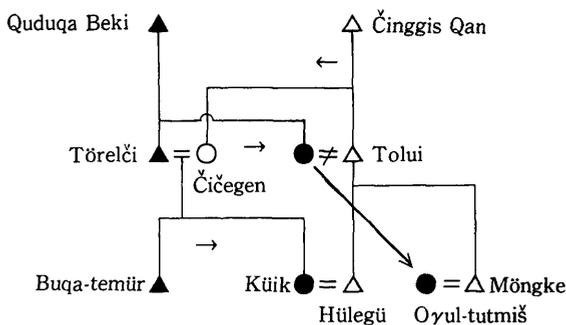


図7 チンギス・カン家とクドカ・ベキ家の通婚関係 (1)

分析していきたい。

(1) トレルチ (Törelči) とチチェゲン (Čičegen) の婚姻 (図7, 史料A)

前述のように、チンギス・カン家とオイラト族クドカ・ベキ家との間で通婚関係がスタートした最初の婚姻が、このクドカ・ベキの息子トレルチとチンギス・カンの娘チチェゲンとの婚姻である。

史料Aに「チンギス・カンは、彼らと通婚関係を結んで、娘を与えたり貰ったりし」とあることから明かなように、チンギス・カンは、このとき相互的な通婚関係を確立しようとしたのであり、実際、このトレルチとチチェゲンの婚姻は、トルイとオグル・トトミシの婚姻と組み合わせると、相互的な姉妹交換婚になるはずであった。ところが、なんらかの事情で後者の婚姻は実現しなかった。この点については、次の(2)でもう一度言及する。

トレルチとチチェゲンが結婚した年については、やや確定することが困難であるが、ある程度推測することはできる。上限はクドカ・ベキが帰順した1208年であり、下限は、トレルチとチチェゲンの娘であるクイクがフREGと結婚し、二人から1234年にジュムクルが生まれていること¹⁹⁾から逆算して、遅くとも1210年代であろう。

(2) モンケ・カン (Mönge Qan) とオグル・トトミシ (Ögöl-tutmiš) の婚姻 (図7・図8, 史料A・E)

史料Aによると、チンギス・カンがこのオグル・トトミシを娶ろうと秘かに思ったことがあったらしいが、実際には、彼女は、末子のトルイの婚約者となった(史料E)。しかし、なんらかの事情でその婚姻は実現せず、結局、トルイの息子のモンケが娶った。

もし、婚約した通りに彼女とトлуйが結婚していれば、図7のように、(1)の婚姻と組み合わせて、「姉妹交換婚」になることが重要である(宇野 1993: 84-85)。後述するウングラト族との通婚関係においても、相互的な通婚関係がスタートするときには、姉妹交換婚が行なわれている。従って、チンギス・カン家の縁組システムの特徴の一つとして、相互的な通婚をスタートさせる場合には、姉妹交換婚を行うことが多いといえる。

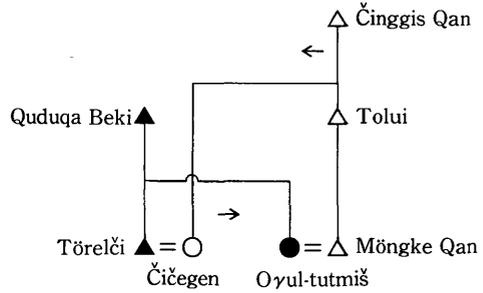


図8 チンギス・カン家とクドカ・ベキ家の通婚関係 (2)

ところで、オグル・トトミシは、最終的にはモンケと結婚したので、その結果、姉妹交換婚ではなくなり、図8のような、変則的な型になった。前述のケレイト族のチャウル・ベキとジョチの縁組が、これと同型の組合せであるので(図4)、これからも相互的な通婚関係がスタートしうると思われる。しかし、実際には、オグル・トトミシが早く死去し彼女から男児が生まれなかったためか、モンケ家との通婚関係は、これ以上連続しなかった。

なお、モンケがオグル・トトミシを娶った時期は、はっきり確定することがむずかしいが、父トлуйが死去した1232年から3-4年以内に、モンケはオグル・トトミシを娶り彼女から娘のシリシが生まれたと考えられるので(宇野 1993: 79-80)、従ってオゴデイ・カンの治世であることは確かである。以下に述べるトレルチの娘たち、すなわちオグル・トトミシの姪たちがチンギス・カン家に嫁いだ時期も、推定することができ、(4) (6)については、やはりオゴデイの治世である(宇野 1993: 87)。

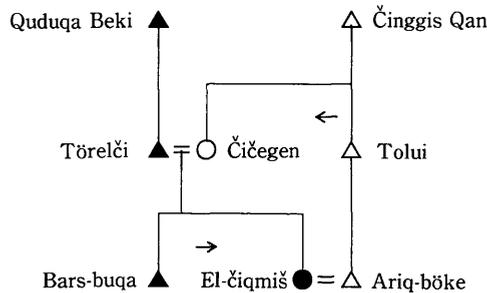


図9 チンギス・カン家とクドカ・ベキ家の通婚関係 (3)

(3) アリク・ブケ (Ariq Böke) とエル・チクミシ・カトン (El-čiqmiš Qatun) の婚姻 (図9, 史料A・B)

トレルチの次世代では、トレルチとチチェゲンの娘のうちエル・チクミンが、トルイの息子アリク・ブケに嫁いだ。この婚姻は、アリク・ブケから見れば、父の姉妹の娘 (FZD) との婚姻であるので、従来の人類学のモデルを当てはめれば、「父方交叉イトコ婚」にあたる。しかし本稿では、夫と妻の系譜関係から見た近親婚としてのタイプを問題にするのではなく、2家系間でどのような交換のパターンにもとづいて女性を交換したかを重視したい。従って、この婚姻は、トレルチが妻チチェゲンを娶ったお返しに、妻の兄弟の息子のアリク・ブケに、娘のエル・チクミンを嫁がせた婚姻、すなわち「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」と考えたい²⁰。

上述の「姉妹交換婚」が、「妻の兄弟にお返しとして姉妹を嫁がせる婚姻」であることと比較すると、2集団間のギブ・アンド・テイクの女性の交換であることは同じであるが、1世代後でお返しをする点が異なる。

(4) フレグ・カン (Hülegü Qan) とクイク・カトン (Küik Qatun) の婚姻 (図7, 史料A)

チチェゲンから生まれた娘うち、クイクは、アリク・ブケの兄フレグに嫁いだ。この婚姻も、フレグから見れば、父の姉妹の娘との婚姻であり「父方交叉イトコ婚」であるが、(3)と同様に、トレルチを中心とした交換のパターンを見れば、「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」である。

(5) バトゥ (Batu) とベキ (Beki) の婚姻 (図10, 史料H)

トレルチの娘のうち、ベキはジョチの次子バトゥに嫁いだ。史料Hに、ベキとオルジェイはオルガナの姉妹とあり、史料Fにオルジェイはトレルチの娘とあるので、

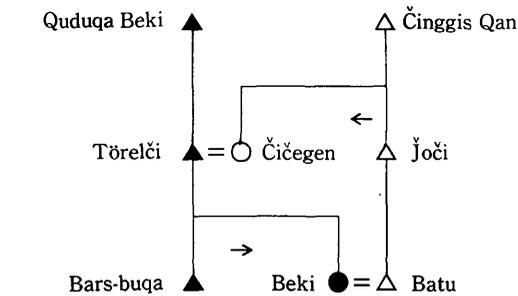


図10 チンギス・カン家とクドカ・ベキ家の通婚関係 (4)

ベキはトレルチの娘であることがわかるが、母親は誰かわからない(宇野 1993: 86)。従って、「父方交叉イトコ婚」かどうかはわからないが、交換のパターンからみれば、この婚姻も、トレルチが「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」である。

(6) カラ・フレグ (Qara-hülegü) とオルガナ・カトン (Oryana Qatun) の婚姻 (図 11, 史料 A)

チチュェゲンから生まれた娘のうち、オルガナは、チャガダイの孫カラ・フレグに嫁いだ。これは、カラ・フレグから見れば、父の父の姉妹の娘 (FFZD) との婚姻であり、上の2つと異なるが²¹⁾、トレルチが「妻の兄弟の孫にお返しとして自分の娘を嫁がせ」という点で、そこにギブ・アンド・テイクの互酬の原理が働いていることを読みとることが出来る。

トレルチが、「妻の兄弟の息子」でなく「妻の兄弟の孫」にオルガナを嫁つがせたことには理由がある。カラ・フレグの父モエトッケン²²⁾は、チャガダイの後継者と見なされていたが若くして戦死し、トレルチの娘たちが次々とチンギス・カン家に嫁いだ時期には、すでに死去していた。そのため、その息子でチャガダイの後継者と見なされていたカラ・フレグが、オルガナを娶ることになったのである。

以上の4例は、チチュェゲンを娶ったトレルチが、そのお返しとして娘を妻の出身家系へ嫁がせるという互酬の原理にもとづく婚姻であった。そのうち、(3)の図9はさらに連続して図13・14になり、(4)の図7は図15になる。

ここで、(2)～(6)の5例の政治的背景を、別稿での分析にもとづいてまとめておきたい(宇野 1993)。チンギス・カン家の姻族として最も力を持っていたのは、前述のように、チンギス・カンの第1カトンの弟の家系であるウングラト族のアルチ・ノヤン家であり、チンギス・カンの子孫にとって、アルチ・ノヤン家との姻戚関係は帝位継承に有利に働く条件の一つであったと思われる。チンギス・カンの治世には、チンギス

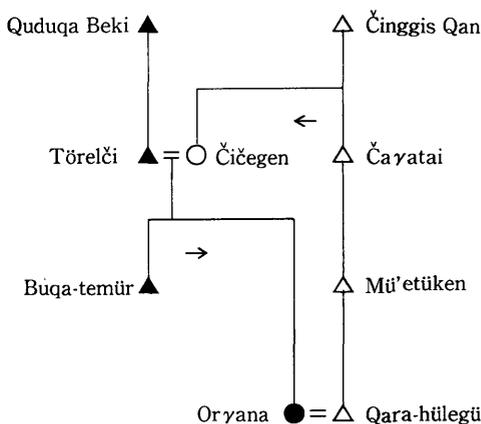


図11 チンギス・カン家とクドカ・ベキ家の通婚関係 (5)

・カンの息子のうち、年上のジョチとチャガタイがアルチ・ノヤン家と姻戚関係を結んだ。ところが、つぎのオゴデイ・カンの治世になると、弟のオゴデイとトルイの家系が、巻き返しを図るようにアルチ・ノヤン家との姻戚関係を強め、ジョチ家とチャガタイ家はアルチ・ノヤン家から遠ざかる。

このように最有力の姻族アルチ・ノヤン家をめぐって駆け引きが続いていたとき、チンギス・カンの娘チチェゲンを娶っていたクドカ・ベキ家のトレルチは、姻族として勢力拡大を目指し、アルチ・ノヤン家との関係が薄くなったジョチ家とチャガタイ家、そしてトルイ家の息子なかでもアルチ・ノヤン家との姻戚関係がなかった年下のフレグとアリク・ブケに次々と自分の娘を嫁がせたのである。トルイの長子モンケは、すでにアルチ・ノヤン家の娘を娶っていたが、前述のように、父親の婚約者であったトレルチの娘オグル・トトミシも娶った。

以上のように、アルチ・ノヤン家とチンギス・カン家の姻戚関係の隙間をぬって、クドカ・ベキ家は一気に広く網をかけるようにチンギス・カン家との姻戚関係を拡大したのである。これらトレルチの娘たちの婚姻が、いずれも互酬の原理に基づいた交換のパターンにそっていることからわかるように、この縁組システムは、同世代で複数の娘を嫁がせば、交換のパターンを崩さずに姻戚関係を分岐させ、姻戚関係を拡大することができるという特徴を持っている。

その後、オゴデイ家が帝位継承争いに敗れ、トルイ家のモンケが即位すると、アルチ・ノヤン家は姻族としての勢力を弱め、モンケ・カンの治世には、クドカ・ベキ家がそれに代わって姻族としての勢力を増した。クドカ・ベキ家出身の寡婦オルガナが、チャガタイ家当主の座についたことはそれをよく示している。

(7) イナルチ (Inalči) とクルイ・エゲチ (Qului Egeči) の婚姻 (図12, 史料 A)

クドカ・ベキの息子イナルチは、ジョチの娘クルイ・エゲチを娶った。この婚姻は、

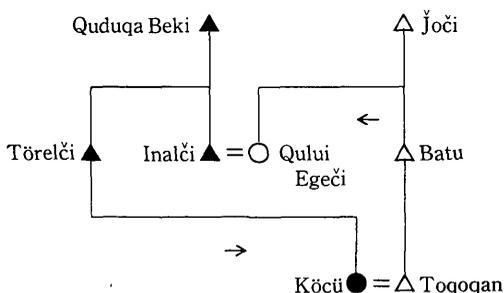


図12 チンギス・カン家とクドカ・ベキ家の通婚関係 (6)

史料Aにバトゥが姉妹のクルイ・エゲチを嫁がせたとあるように、アルチ・ノヤン家から遠ざかったバトゥが、自ら上述のベキを娶った上に、姉妹をクドカ・ベキの息子に嫁がせ、クドカ・ベキ家との姻戚関係を強めたことを示している。交換のパターンとしては、あまりきれいには連続していない。

(8) トコカン (Toqoqan) とコチュ・カトン (Köcü Qatun) の婚姻 (図12, 史料 A・C)

バトゥの息子トコカンは、トレルチの娘コチュを娶った。この婚姻は、(7)の婚姻に対するお返しと考えると、やや変則的ではあるが、図12のような交換のパターンを見いだすことができる。

(9) チョバン (Čoban) とノムガン (Nomuyan) の婚姻 (図13, 史料 A・B)

ブカ・テムルの息子のチョバンは、アリク・ブケとナイマン出身のクトクナ・カトンの間に生まれた娘ノムガンを娶った。この婚姻は、アリク・ブケからみると、「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」であり、アリク・ブケ自身の婚姻を同じ交換のパターンを持つ。ところが、チョバンと妻の系譜関係から見ると、これは「父の姉妹の夫の別の妻の娘」との婚姻であり、「父方交叉イトコ婚(父の姉妹の娘との婚姻)」ではない。モンゴルの親族名称体系において、「父方交叉イトコ」はjee(『元朝秘史』のje'e)であるが、「父の姉妹の夫の別の妻の娘」はjeeのカテゴリーに含まれないので、「類別的父方交叉イトコ」との婚姻にも当たらない。従って、この婚姻は、「父方交叉イトコ婚」に形はよく似ているが、「父方交叉イトコ婚」

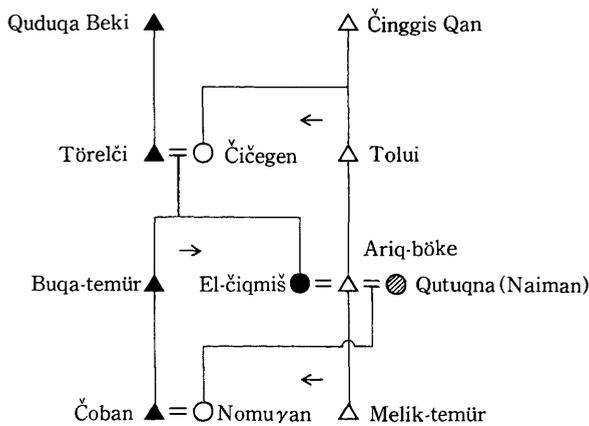


図13 チンギス・カン家とクドカ・ベキ家の通婚関係 (7)

ではないのである。男性からみて「父の姉妹の夫の別の妻の娘」というのは、直接には系譜関係のない人間である。図13で見ると、チョパンにとって、ノムガンとの関係は、2世代上のトレルチとチチェゲンの婚姻を通した遠い系譜関係はあるが、父の姉妹であるエル・チクミンを通した系譜関係はないことがわかる²²⁾。

従って、従来の人類学の縁組理論のように、夫と妻の系譜関係によって婚姻をタイプ分けするという方法をとるならば、図13の一連の3世代にわたる交換婚のうち、エル・チクミンとアリク・ブケの婚姻は、「父方交叉イトコ婚」であるが、次世代のチョパンとノムガンの婚姻は「父方交叉イトコ婚」ではないので、図13の一連の婚姻には一貫性がないということになってしまうのである。

上述のように、交換のパターンに注目してみれば、トレルチも次世代のアリク・ブケも、「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」であり、一貫した原則に基づき、みごとに連続した「女性の交換」を行っていることがわかる。

このようなことが起こる原因の1つは、チンギス・カン家の男が一夫多妻婚を行うために、その娘たちが異なる母親をもつことにある。そして、チンギス・カン家の縁組システムでは、ギブ・アンド・テイクのお返しとして嫁がせる娘は、その母親が誰であるかは問題としない。従って、交換のパターンとしては同じでも、「父方交叉イトコ婚」になる場合とならない場合がでてくるのである。この点が最も重要であり、チンギス・カン家の縁組システムを「父方交叉イトコ婚」として解釈することができず、女性の交換のパターンそのものを分析しなければならない最大の理由である。

以上より、図13の3組の婚姻は、2つの家系間で、互酬の原理にもとづき交互に行なわれた縁組であり、交換のパターンとしては3世代連続していると考えることができる。

(10) パルス・ブカ (Bars-buqa) とエル・テムル (El-temür) の婚姻 (図14, 史料D)

トルイとナイマン出身のリンクン・カトンの間に生まれたエル・テムルは、トレルチの息子パルス・ブカに嫁いだ。この婚姻は、(3)のアリク・ブケとエル・チクミンの婚姻と組み合わせると、姉妹交換婚になる。しかし、ここで相互的な通婚がスタートしたわけではないのに、姉妹交換婚が行なわれたのはなぜであろうか。おそらくこれは、エル・チクミンがアリク・ブケの第1カトンとなりながら彼女からは男児が生まれなかったことと関係があると思われるが、このことは、第5章で改めて論ずることにしたい。

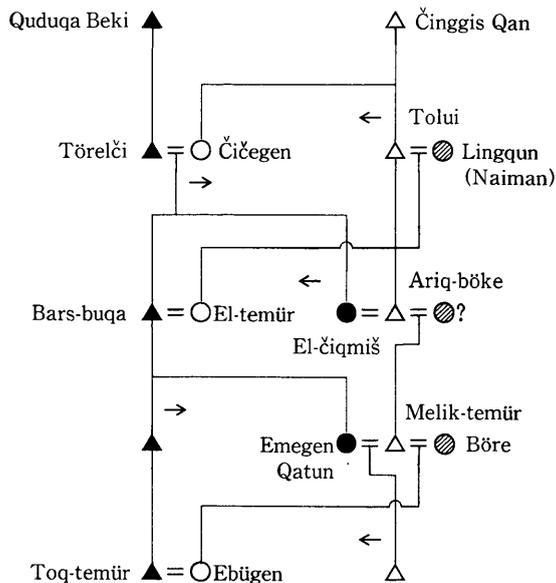


図14 チングス・カン家とクドカ・ベキ家の通婚関係 (8)

ところで、政治的な視点からみて重要であるのは、図14の中のパルス・ブカとアリク・ブケの関係である。モンケ・カンの死後、第5代クビライ・カンの即位をめぐる帝位継承争いがおこり、それは、アリク・ブケ家とオイラト族トレルチ家、クビライ家とウングラト族アルチ・ノヤン家（特にその息子のナチン家）の結びつきを決定的にした。1261年のシムルト湖の戦いでは、ナチンの率いる1万隊はクビライ軍の主力の一つであり、クビライ軍がアリク・ブケ軍を敗り、アリク・ブケ軍についていた多くのオイラト族が殺された（岡田 1974: 7; 杉山 1982: 304-305）。当時、トレルチの息子たちのうち、長子ブカ・テムルはフレグとともにイランに行ってしまったので、モンゴル高原に残っていたのは、次子バル・トアと第三子パルス・ブカである。とくにパルス・ブカは、アリク・ブケにとって父方の交叉イトコである上に、姉妹交換婚によって二重の姻戚関係にあったので、アリク・ブケにとって最も信頼できる味方であったと思われる。

(11) メリク・テムル (Melik-temür) とエメゲン・カトン (Emegen Qatun) の婚姻 (図14, 史料D)。

パルス・ブカの娘エメゲン・カトンは、アリク・ブケの息子メリク・テムルと結婚した。エメゲン・カトンの母親がエル・テムルであるかどうかは史料に記載がないの

でわからない。そのため、もし従来の縁組理論を適用して、夫と妻の系譜関係を問題にするならば、「父方交叉イトコ婚」か「父の姉妹の夫の別の妻の娘との婚姻」か確定できないことになるが、ここでは交換のパターンを問題にするため、エメゲン・カトンの母親が誰であれ、バルス・ブカからみて「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」が行われたことになり、互酬の原理にしたがっていることがわかる。

(12) トク・テムル (Toq-temür) とエブゲン (Ebügen)²³⁾ の婚姻 (図14, 史料D)

メリク・テムルとドルバン族のボレとの間に生まれたエブゲンは、バルス・ブカの孫のトク・テムルと結婚した。この婚姻は、(7) のチョパンとノムガンの婚姻と同タイプであり、トク・テムルから見ると、「父の姉妹の夫の別の妻の娘との婚姻」であって、「父方交叉イトコ婚」ではない。しかし、交換のパターンを問題にするならば、メリク・テムルから見て、「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」が行われたことになり、互酬の原理にもとづく交換のパターンとしてはきれいに連続していることがわかる。

(13) フレグ (Hülegü) とオルジェイ (Öljei) の婚姻 (図15, 史料A)

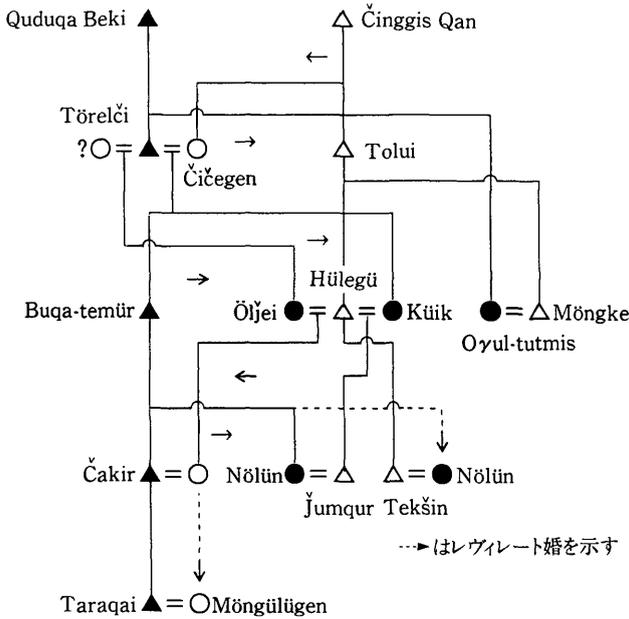


図15 チンギス・カン家とクドカ・ベキ家の通婚関係 (9)

フレグは、トレルチの娘クイクを娶った以外に、クイクの異母姉妹のオルジェイも娶った。トレルチの娘のうち、チングス・カンの娘チチェゲンから生まれたことが確認できるのは、エル・チクミシ、オルガナ、クイクの3人であり、オルジェイは、史料Fに他の母親から生まれたと記されているので、チチェゲンの娘ではない。従って、フレグとオルジェイの婚姻は、「父方交叉イトコ婚」にはならないが、交換パターンはクイクの場合と同じであり、トレルチからみて「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」が行われたことになる。この婚姻の時期については、史料Fに「彼女（オルジェイ）をモンゴル地方で娶った」とあり、フレグが西アジア遠征に出発する前にオルジェイを娶ったことがわかる。一方、クイクの死去について史料Fに、「クイク・カトンがモンゴル地方でなくなったとき」とあるので、クイクが亡くなったのも西アジア遠征前であることがわかる。従って、おそらく、クイクの死後、フレグは「ソロレート婚」としてクイクの姉妹のオルジェイを娶ったのであろう。

ただし、オルジェイは、クイクの死後、クイクの地位をも継承したのではなかった。なぜなら、史料Fに、クイクの財産であった牧地が、ウングラト族のアルチ・ノヤン一族の出身であるクトイ・カトンに与えられたとあるからであり、クイクに代わってフレグの第1カトンになったのは、クトイ・カトンであった。このことは、オゴデイ、グユクの治世に、フレグが一時アルチ・ノヤン家との姻戚関係に傾いた時期があったことを示している。しかし、1251年のモンケの即位以後、クドカ・ベキ家が姻族としての勢力を強め、1253年にフレグが西アジア遠征に向かったときには、モンゴル高原に残された宮廷はクドカ・ベキ家の関係者で固められ、クトイの宮廷はクドカ・ベキ家の親戚筋にあたる側室の手に委ねられ、再びフレグとオイラト族クドカ・ベキ家との姻戚関係が強まることになる（宇野 1993: 91-95）²⁴⁾。

(14) チャキル (Čakir) とモングルゲン (Möngülügen) の婚姻 (図15, 史料G)

ブカ・テムルの息子のチャキルは、フレグとオルジェイから生まれたモングルゲンを娶った。これは、チャキルから見れば、父の姉妹の娘 (FZD) との「父方交叉イトコ婚」であるが、交換のパターンをフレグから見れば、クイクとオルジェイを娶ったお返しに、二人の兄弟ブカ・テムルの息子チャキルに娘モングルゲンを嫁がせたことになり、「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」が行われたことになる。

図15を見てみると、互酬のパターンがきれいにまもられており、世代毎に婚出する方向が入れ替わり、ギブ・アンド・テイクの交換婚が連続して行われたことがわかる。

なお、チャキルが死んだ後、モングルゲンはチャキルの息子のタラカイと結婚した。

(15) ジュムクル (Jumqur) とノルン (Nölün) の婚姻 (図15, 史料A)

この婚姻は、ジュムクルから見ると、母の兄弟の娘 (MBD) との婚姻であるので母方交叉イトコ婚である。一方、上のチャキルとモングルゲンの婚姻と組み合わせてみると、姉妹交換婚になるが、これは、相互の通婚がスタートした例ではないので、やや例外的である。おそらく、1251年のモンケの即位後、クドカ・ベキ家が姻族としての勢力を強めたことと関係があるのであり、前述したように、1253年、フレグは西アジア遠征に出発するときに、モンゴル高原の宮廷をクドカ・ベキ家の関係者で固めようとしたが、その頃、息子ジュムクルにもクドカ・ベキ家の娘ノルンを娶らせ、その上で、モンゴル高原の牧地を彼に委ねたのではないかとと思われる。

なお、ジュムクルが死んだ後、このノルンは、ジュムクルの弟のテクシンと結婚した。

(16) モンケ・テムル (Mönke-temür) とオルジェテイ (Öljetei) の婚姻とタラカイ (Taraqai) とアラ・クトルグ (Ara-qutluy) の婚姻 (図16, 史料A)

このジョチ家とクドカ・ベキ家の間で行なわれた2組の婚姻には、図16のように、

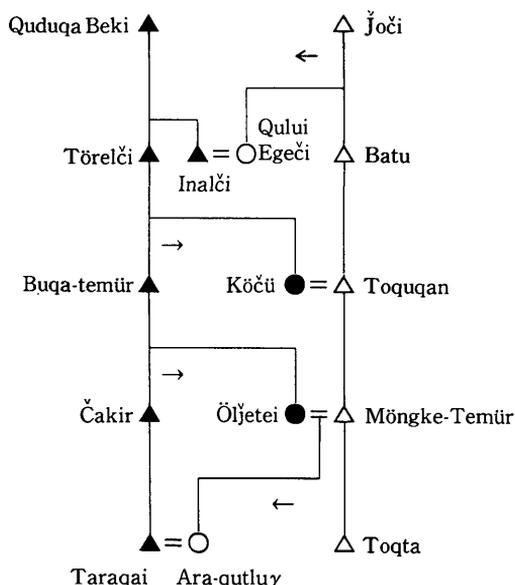


図16 チンギス・カン家とクドカ・ベキ家の通婚関係 (10)

ギブ・アンド・テイクの交換のパターンがある。モンケ・テムルから見れば、妻オルジュテイのお返しとして、娘アラ・クトルグを、妻の兄弟の息子タラカイに嫁がせたことになり、「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」である。

ところが、もう1世代上のコチュとトコカンの婚姻との連続性を考えてみると、ギブ・アンド・テイクのパターンは崩れており、2世代連続してクドカ・ベキ家から婚出している。ブカ・テムルは、フレグとともにイランにいき、図15のように、ブカ・テムル家とフレグ家の間に通婚関係が連続していたことを考えると、この2組の婚姻は、なんらかの政治的事情のために、ブカ・テムル家が、ある時期ジョチ家に接近したことを表わしているのであろう。

3.3. 小結

オイラト族のクドカ・ベキ家とチンギス・カン家との通婚関係に関する以上の分析から、その通婚パターンの特徴についてまとめれば、次のようになるであろう。

(1) 相互的な通婚がスタートするときは、「姉妹交換婚（妻の兄弟に自分の姉妹を嫁がせる婚姻）」が行われている。それ以外にもなんらかの理由により、結果的に「姉妹交換婚」になることがある。

(2) 以上検討した通婚関係の中に、「父方交叉イトコ婚」（「類別的父方交叉イトコ」との婚姻も含む）は6例（フレグとクイク、アリク・ブケとエル・チクミシ、カラ・フレグとオルガナ、パトゥとベキ、チャキルとモングルゲン、タラカイとアラ・クトルグの婚姻）あるが、「父の姉妹の夫の別の妻の娘との婚姻」は2例（チョパンとノムガン、トク・テムルとエブゲンの婚姻）あり、どちらか不明のものが1例（メリク・テムルとエメゲン・カトンの婚姻）ある。「父方交叉イトコ婚」の数が多いのは事実であるが、必ず「父方交叉イトコ婚」である必要はなく、「父の姉妹の夫の別の妻の娘との婚姻」でもこの通婚関係を連続させることができる。つまり「父方交叉イトコ婚」であることは、必要条件ではない。

(3) 「父方交叉イトコ婚」でも「父の姉妹の夫の別の妻の娘との婚姻」でも、「妻の兄弟の息子に、お返しとして自分の娘を嫁がせる」という交換のパターン

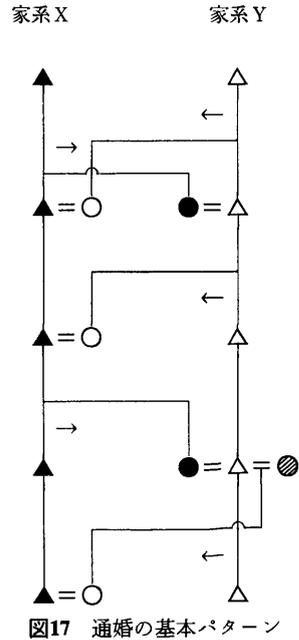


図17 通婚の基本パターン

があるのであり、この「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」こそが、チンギス・カン家とクドカ・ベキ家の通婚関係にもっとも多く見られる基本型である。このギブ・アンド・テイクの互酬の原理が、通婚関係を次世代へ連続させている。

(4) この縁組システムの「女性の交換」の基本的なパターンを図示すれば、図17のようになる。1番下の世代の婚姻は、「父の姉妹の夫の別の妻の娘との婚姻」の場合である。

クドカ・ベキ家との通婚関係については、以上のようにまとめることができる。次に、ウングラト族のアルチ・ノヤン家の通婚関係について同様な分析を行い、その上で改めて総合的な考察を行ないたい。

4. ウングラト族アルチ・ノヤン家とチンギス・カン家の通婚関係

ウングラト族については、第2章で姻族としてのウングラト族の基本的な特徴を説明をしたが、従来の研究によりつつ、もう少し補足しておきたい。

ウングラト族は、もともと大興安嶺の西側、アルグン河とガン河にはさまれた地域に居住していた部族であるが、チンギス・カンの即位後、そこをチンギス・カンの弟たちのために明け渡し、アルチ・ノヤンを中心とするウングラト族の5つの千戸は、南方のシラ・ムレン流域からシリン・ゴル草原にいたる地域へ移住させられた。以後、アルチ・ノヤン家は、ダライ湖北西岸を夏営地、シラ・ムレン南岸の現在の烏丹付近を冬営地としていた。後に、夏営地には応昌府（路）、冬営地には全寧路が築かれる（箭内 1930: 595-606; 杉山 1992: 100-101）。

アルチ・ノヤンは、オゴデイ・カンの時代に、万戸長の位を授かり、以後、万戸長の位は、図19に付した順番で、アルチ・ノヤンの子孫に継承されていった。チンギス・カンの子孫にとって、アルチ・ノヤン家と姻戚関係を持つことは、帝位継承に有利であったらしく、誰がアルチ・ノヤン家との姻戚関係を継承するかをめぐって、激しい凌ぎ合いが起こり、かえってそれがアルチ・ノヤン家にとってマイナスになることもあった。

アルチ・ノヤンの娘チャブイがクビライに嫁ぎ、アルチ・ノヤン家がクビライ家の姻族になったのは、第2代オゴデイ・カンの即位前後である。第4代モンケ・カンが即位し、弟のクビライが、中国方面の統治を任されると、クビライは、アルチ・ノヤ

ン家の住地の南方に隣接する金蓮川（後の上都一帯）に本拠地を置き、ますますアルチ・ノヤン家との絆を深めていった。以後、アルチ・ノヤン家は、元朝の夏の都である上都からみて東北方に隣接する地域を占め、軍事的にみて最重要地域を任されていたことになる（杉山 1984: 490-491, 493-494; 1993: 151-154）。

アルチ・ノヤン家の当主として万戸長になった者は、チンギス・カン家内の政争に関わることが多く、敵対勢力の打倒に重要な役割を果たしてきた。第3代万戸長ナチンはクビライとアリク・ブカの帝位継承争いに、第5代万戸長テムルはナヤンの乱に、第6代万戸長マンジタイはカイドウの乱に、それぞれクビライ側の重要な戦力として参加してきた。ただ、シリギの乱のときには、第4代万戸長オロチンが、乱に乗じた弟のジルグダイに殺されてしまったため、応昌は反乱軍に包囲され、クビライ政権は一時非常事態に陥ることになった。このような例からわかるように、元朝政権にとって、アルチ・ノヤン家は、最も信頼されていた姻族であり、軍事的にも重要な役割を担っていたのである。

4.1. 史料

諸史料から通婚に関する箇所をピックアップし、それにアルファベットをふって列挙する。この史料I~Xにもとづいて、次の議論を進めていくことにする。

I もう一つウングラトのグループがあり、そのリーダーはデイ・ノヤン (Dei Noyan < Deī Nūyān) であった。彼には、アルチ・ノヤン (Alči Noyan < Ālji Nūyān) とホク・ノヤン (Hoqu Noyan < Hūqū Nūyān) という2人の息子がおり、ボルテ・フジン (Börte Üjin < Bürte Üjin) という名の娘がいた。チンギス・カンは青年期の初めに彼女を求めたが、彼女の父親が非常に渋った。アルチ・ノヤンはチンギス・カンと仲が良かったので、その姉を彼に与えようと努力した。彼女は年齢ではアルチ・ノヤンより上であった。（『集史』部族篇ウングラト族, JT/A1: 394）

J (チンギス・カンの) 第1夫人のボルテ・フジン (Börte Fūjin < Bürte Fūjin) は、ウングラト族の長であり王であるデイ・ノヤン (Dei Noyan < Deī Nūyān) の娘であった。彼女は、全カトンの中で最も信頼され最も偉大なカトンであり、名声を馳せた4人の年上の息子と5人の娘の母親であった。（『集史』チンギス・カン紀, JT/TS 1518: fol. 64b）

K 禿満倫 (トマルン) 公主, 適赤窟 (チグウ) 駙馬。(『元史』巻109, 諸公主表)

L 4番目の娘はトマルン (Tomalun < Tūmālūn) である。彼女をウングラトの王の息子に与えた。彼の名は グレゲン・グレゲン (Güregen Güregen < Kūrkān Kūrkān) である。グレゲン Güregen は「婿」であるけれども、彼の名につけられている。(『集史』チンギス・カン紀, JT/TS 1518: fol. 65a)

M チンギス・カンの時代に、人々がアルチ・ノヤン (Alči Noyan < Alji Nūyān) と呼んでいたある信頼できるアミールがおり、彼の名は デレゲ・グレゲン (Derge Güregen < Derke Kūrkān) であった。彼には Shenkkū Kūrkān という名の息子がいた。チンギス・カンは、他のウングラト諸族から4千人の男を分けて彼に委ね、自分の娘でトルイ・カン (Tolui Qan < Tūlūi Khān) より年上のトマルン (Tomalun < Tūmālūn) を彼に与え、彼をチベット (Tūbāt) 地方へ派遣した。現在まで彼らの子孫がそこに居る。(『集史』部族篇ウングラト族, JT/A1: 396-397; JT/KMSM 2131: fol. 31b)

N ウングラト (Unggirad < Qunqrāt) 族出身の Shenkū Kūrkān の千戸。彼はアルチ・ノヤン (Alči Noyan < Ālji Nūyān) の息子であり、(彼の) トマルン・カトン (Tomalun Qatun < Tūmālūn Khātūn) はチンギス・カンの娘である。この4千の軍隊をウングラトから分けて彼に与え、チベット (Tabbat) 方面へ派遣した。彼らはまだそこに住んでいる。(『集史』チンギス・カン紀, JT/TS 1518: fol. 130a)

O アルチ・ノヤン (Alči Noyan < Ālji Nūyān) には、ナチン (Način < Nājīn) の下に チグ・グレゲン (Čiyu Güregen < Jikū Kūrkān) という名の息子がいた。トマルン (Tomalun < Tūmālūn) という名のチンギス・カンの娘を娶ったダイルカイ・グレゲン (Dāirkāi Kūrkān) はウングラト出身であった。(『集史』部族篇ウングラト族, JT/A1: 401)

P ジョチ・カン (Jōči Qan < Jūji Khān) の2番目の息子バトゥ (Batu < Bātū)。バトゥはウングラト族出身のアルチ・ノヤン (Alči Noyan < Alji Nūyān) の娘のオキ・フジン・カトン (Öki Fūjin Qatun < Ūki Fūji Khātūn) から生まれた。(『集史』ジョチ・カン紀, JT/TS 1518: fol. 158a)

Q 特薛禪（デイ・セチェン）、姓孛思忽兒，弘吉剌（コンギラト）氏，世居朔漠。本名特，因從太祖起兵有功，賜名薛禪，故兼稱曰特薛禪。女曰孛兒台，太祖光獻翼聖皇后。

子曰按陳（アルチ），從太祖征伐，凡三十二戰，平西夏，斷潼關道，取回紇尋斯干城，皆與有功。歲丁亥（太祖二十二年，1227年），賜號國舅按陳那顏（アルチ・ノヤン）。壬辰（太宗四年，1232年），賜銀印，封河西王，以統其國族。丁酉（太宗九年，1237年），賜錢二十萬緡，有旨「弘吉剌氏生女世以為后，生男世尚公主，每歲四時孟月，聽讀所賜旨，世世不絕」。（中略）

子幹陳（オチン），歲戊戌（太宗十年，1238年）授萬戶，尚睿宗（トルイ）女也速不花（イエス・ブカ）公主。

弟納陳（ナチン），歲丁巳（憲宗七年，1257年）襲萬戶。（中略）（中統二年，1261年）薨，葬末懷禿。幹羅陳（オロチン）襲萬戶，尚完澤（オルジュイ）公主。完澤公主薨，繼尚囊加眞（ナンギヤジン）公主。至元十四（1277）年薨，葬拓刺里，無子。弟曰帖木兒，至元十八年襲萬戶。（中略）（至元二十五年，1288年）薨，葬末懷禿。子二人，長曰彌阿不刺（ディウバラ），次曰桑哥不刺（センゲ・ブラ），皆幼。

至元二十七（1290）年，以其弟蠻子台（マンジタイ）襲萬戶，亦尚囊加眞公主（ナンギヤジン）。成宗即位，封皇姑魯國大長公主，以金印封蠻子台為齊寧王。（中略）囊加眞公主薨，繼尚裕宗女喃哥不刺（ナンガ・ブラ）公主。蠻子台薨，年五十有二。

大德十一（1307）年三月，按答兒〔禿〕長子瑯阿不刺（ディウバラ）襲萬戶，尚祥哥刺吉（センゲ・ラギ），六月，封大長公主，賜瑯阿不刺金印，加封魯王。（中略）皇慶間，加封皇姊大長公主。天曆間，加號皇姑徽文懿福〔貞〕壽大長公主。至大三（1310）年，瑯阿不刺薨，葬末懷禿。

阿里嘉室利（アリギヤシリ），瑯阿不刺嫡子也。至大三年，甫八歲，襲萬戶。四（1311）年七月，襲封魯王，尚朶兒只班（ドルジバン）公主。元統元（1333）年，阿里嘉室利薨。至順間，封朶兒只班號肅雍賢寧公主。

桑哥不刺（センゲ・ブラ）者，魯王瑯阿不刺之弟，阿里嘉室利之叔也。（中略）成宗時，奉旨尚普納（ブナ）公主，至順間，封鄆安大長公主，授桑哥不刺金印，封鄆安王，職千戶。元統元年，授萬戶。（元統）二（1234）年三月，加封鄆安公主號皇姑大長公主，加封桑哥不刺魯王。以疾薨，年六十一。此皆以駙馬襲封王爵者也。（『元史』卷118，特薛禪伝）

R 魯國公主位。魯國大長公主也速不花（イエス・ブカ）、睿宗（トルイ）女也。適皇國舅魯忠武王按嗔那顔（アルチ・ノヤン）子幹陳（オチン）駙馬。

魯國公主薛只干（セチェゲン）、太祖（チンギス・カン）孫女、適幹陳（オチン）弟納陳（ナチン）駙馬。

魯國長公主完澤（オルジェイ）、適幹陳（オチン）男幹羅眞（オロチン）駙馬。魯國大長公主囊家眞（ナンギヤジン）、世祖（フビライ）女、適納陳（ナチン）子帖木兒（テムル）、再適帖木兒弟蠻子台（マンジタイ）。

魯國大長公主南阿不刺（ナンガブラ）、裕宗女、適蠻子台。魯國徽文懿福（眞）[貞]壽大長公主祥哥刺吉（センゲ・ラギ）、順宗（ダルマバラ）女、適帖木兒（テムル）子彌阿不刺（ディウバラ）。

魯國大長公主普納、適帖木兒子魯王桑哥不刺（センゲ・ブラ）。肅雍賢寧公主朶兒只班（ドルジバン）、適彌阿八刺子阿里嘉實利（アリギヤシリ）。(『元史』卷109, 諸公主表)

S 世祖昭睿順聖皇后，名察必（チャブイ）、弘吉刺氏，濟寧忠武王按陳（アルチ）之女也。生裕宗（チンキム）。(『元史』卷114, 后妃伝1)

T クビライ・カン（Qubilai Qan < Qūbīlāi Khān）には多くのカトンや側室がいた。一番上であったのはチャブイ・カトン（Čabui Qatun < Jābūn Khātūn）であり、彼女はウングラトの王族の一人であるアルチ・ノヤン（Alči Noyan < Aljī Nūyān）の娘であった。(『集史』クビライ・カン紀, JT/TS 1518:3fol. 196b)

U 凡其女之為后者，自光獻翼聖皇后以降，憲宗貞節皇后諱忽台，及后妹也速兒，皆按陳從孫忙哥陳之女。世祖昭睿順聖皇后諱察必（チャブイ）、濟寧忠武王按陳（アルチ）之女，其諱帖古倫（テグルン）者，按陳孫脱鈴憐之女，諱喃必（ナムブイ）冊繼守正宮者，納陳（ナチン）孫僊童之女。成宗貞慈靜懿皇后諱實憐答里（シリンドリ）、幹羅陳（オロチン）之女也。(中略) 文宗皇后諱不答失里（ブダシリ）、珣阿不刺（ディウバラ）魯王之女。(『元史』卷118, 特薛禅伝)

V 南必（ナムブイ）皇后，弘吉刺氏，納陳（ナチン）孫仙童之女也。至元二十年，納為皇后，繼守正宮。(『元史』卷114, 后妃伝1)

表1 アルチ・ノヤン家とチンギス・カン家の通婚 (1)

チンギス・カン家出身の夫	アルチ・ノヤン家出身の妻
Möngke (Tului の息子)	忽都台 (Alči Noyan の子孫, 忙哥陳の娘)
Möngke (Tolui の息子)	也速兒 (Alči Noyan の子孫, 忙哥陳の娘)
順宗 Darmabala (Čin-kim の息子)	答吉 Dagi (Alči Noyan の孫渾都帖木兒の娘)
武宗 Qaišan (Darmabala の息子)	眞哥 (Alči Noyan の子孫, 迸不刺の娘)
武宗 Qaišan (Darmabala の息子)	速哥失里 (Alči Noyan の子孫, 哈兒只の娘)
泰定帝 Yesün-temür (Kamala の息子)	八不罕 (Alči Noyan の孫の斡留察兒の娘)
泰定帝 Yesün-temür (Kamala の息子)	必罕 (Alči Noyan の子孫, 買住罕の娘)
泰定帝 Yesün-temür (Kamala の息子)	速哥答里 (Alči Noyan の子孫, 買住罕の娘)

表2 アルチ・ノヤン家とチンギス・カン家の通婚 (2)

アルチ・ノヤン家出身の夫	チンギス・カン家出身の妻
買住罕 (Alči Noyan の子孫, 迸不刺の息子)	拜塔沙 (系譜不詳)
丑漢 (Alči Noyan の次子必哥の子孫)	台忽普都 (系譜不詳)
納合 Noqa (Alči Noyan の子孫)	唆兒哈罕 Sorqaqan (Ögödei の娘)
不只兒 (Alči Noyan の弟の火忽の孫)	斡可眞 (系譜不詳)
脱羅禾 (Dei Sečen の孫)	不魯罕 (系譜不詳)
脱羅禾 (Dei Sečen の孫)	闊闊倫 (Ayurbarwada の娘)
阿哈 (Alči Noyan の息子唆兒火都の息子)	名前不詳

W 成宗貞慈静懿皇后，名失憐答里（シリンドリ），弘吉刺氏，斡羅陳（オロチン）之女也。大徳三（1299）年十月，立為后。生皇子徳壽，早薨。（『元史』卷114，后妃伝1）

X 文宗卜答失里（ブダシリ）皇后，弘吉刺氏，父駙馬魯王瑀阿不刺（ディウバラ），母魯國公主桑哥（吉刺）〔刺吉〕（センゲ・ラギ）。文宗居建業，后亦在行。天曆元年，文宗即位，立為皇后。（『元史』卷114，后妃伝1）

『元史』卷118特薛禅伝，卷109諸公主表には，ここに列挙したもの以外に，表1・表2の婚姻についての記事もある。しかし，これらの婚姻は両親どちらかの系譜関係にはっきりしない点があり，他の婚姻との関係が明かでなく，通婚パターンを論ずることが難しい。従って，本稿では表1・2の婚姻は分析の対象から外すことにする。

4.2. 通婚パターンの分析と解釈

上記の史料に記されている2家系間の通婚関係を分析し図示したものが，図18-21である。この図に従って，オイラトのクドカ・ベキ家の場合と同じように，通婚パターンを解釈していくことにするが，アルチ・ノヤン家の場合は，より詳しいデータがあり，婚姻の時期や政治的背景などもある程度あきらかにできるので，その点も含めて分析しつつ，通婚パターンを解釈していきたい。

(1) チンギス・カン（Činggis Qan=テムジン）とボルテ（Börte）の婚姻（図18，史料I・J・Q）

チンギス・カン（テムジン）は，1180年代前半ころに，デイ・セチェンの娘ボルテと結婚したらしい。『元朝秘史』に記されている，チンギス・カンとボルテの婚約と結婚の話は有名であるが，それは後の時代のウングラト族とチンギス・カン一族との密接な通婚関係の反映であり，フィクションである可能性が高いことはすでに岡田英弘氏によって指摘され

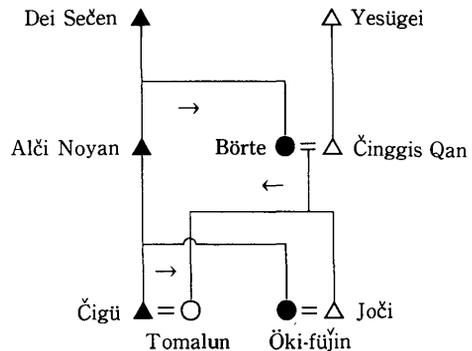


図18 チンギス・カン家とアルチ・ノヤン家の通婚関係 (1)

ている（岡田 1985: 157-160）。チンギス・カンとボルテが結婚したのは、まだチンギス・カンが弱小勢力であった時代であり、史料Iに「チンギス・カンは青年期の初めに彼女を求めたが、彼女の父親が非常に渋った。アルチ・ノヤンはチンギス・カンと仲が良かったので、その姉を彼に与えようと努力した。」と記されているように、デイ・チェンは、この結婚に賛成ではなく、ボルテの弟アルチ・ノヤンの努力でやっと結婚が認められたというのが真実であろう（宇野 1993: 71）。

この結婚は、通婚関係の最初に位置づけられる婚姻であり、結果的には次世代の(2)の婚姻と連続している。しかし、デイ・セチェンが積極的でなかったことから明らかのように、当初から次世代に連続するような相互の通婚関係を結んでいたわけではなかった。

(2) チグ (Čigü) とトマルン (Tomalun) の婚姻 (図18, 史料K・L・M・N・O)

アルチ・ノヤンの息子のチグは、チンギス・カンの娘のトマルンを娶った。(那珂 1907: 326-327)。史料に当たってみるとやや混乱があり、史料Kの『元史』諸公主表では、禿満倫(トマルン) 公主が赤窟(チグ) 駙馬に嫁いだと明記しているが、『集史』では、トマルンの夫の名前が言及箇所毎にバラバラであり矛盾している(史料L, M, N, O)。ただ、『集史』でも、トマルンの夫がアルチ・ノヤンの息子である点は一致しており、また、チグがアルチ・ノヤンの息子の一人であることも記している。また、『元史』『聖武親征録』『集史』『元朝秘史』すべてに、チグ・グレン、チグ駙馬という人物が数回登場する。従って、やはり、那珂氏以来の定説のように、トマルンの夫の名前は「チグ」と考えるのが妥当であろう。

この婚姻は、図18のように、(1)のボルテとチンギス・カンの婚姻と組み合わせると、「父方交叉イトコ婚」であり、交換のパターンを見れば、チンギス・カンが妻ボルテを娶ったお返しとして、ボルテの兄弟の息子に娘のトマルンを嫁がせたことになり、「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」であることがわかる。このように、チグとトマルンの婚姻は、ギブ・アンド・テイクの通婚パターンによって、(1)の婚姻と連続していることがまず注目されるが、それとともに重要であるのは、この婚姻が、(3)のジョチの婚姻と組み合わせると「姉妹交換婚」になることである。「姉妹交換婚」は、クドカ・ベキ家との通婚関係の分析の中で指摘したように、相互的な通婚関係のスタートになる婚姻である。上の世代のチンギス・カンとボルテの婚姻が、相互的な通婚を考えたものではないことはすでに指摘したが、そうである

とすると、このチグとトマルンの婚姻は、上の世代の婚姻と連続しつつ、この世代で「姉妹交換婚」を行い、チンギス・カン家とアルチ・ノヤン家との相互的な通婚をスタートさせた婚姻であったと考えられる。

ここで、結婚の時期について考察しておきたい。チグは1213年にチンギス・カンの末子トルイとともに金朝遠征へ出軍したが、そのことを記した諸史料に、「駙馬赤駒」(『元史』巻1)、「赤渠駙馬」(『聖武親征録』)、「Čügü Güriġen」(『元朝秘史』251節)²⁵⁾、「チグ・グレゲン Jikü Kürkän」(『集史』チンギス・カン紀, JT/TS 1518: fol. 95b)とあり、このときのチグを「駙馬」「グレゲン(婿)」としている点は、諸史料が一致しているので、チグとトマルンの婚姻は、1213年以前であった可能性が高い。トマルンの年齢については推測する材料があり、史料Oにトマルンがトルイより年上であったと記されている。トルイは1213年に22-27歳の間であるので²⁶⁾、トマルンがそれより年上だとすると、この時すでに結婚していてもおかしくない歳である。そして、チグの婚姻がジョチの婚姻と「姉妹交換婚」になっていたことも考慮すると、結婚の時期は、やはり1213年以前のチンギス・カン治世の初期であろう²⁷⁾。

(3) ジョチ (Jöci) とオキ・フジン (Öki Fūjin) の婚姻 (図18, 史料P)

チンギス・カンの長子ジョチは、史料Pの『集史』の記事に見られるように、アルチ・ノヤンの娘、チグの姉妹であるオキ・フジンと結婚し、二人からバトゥが生まれた。バトゥは、1255年に数え48歳で死去しているので (Pelliot 1949a: 29; Boyle 1971: 122)、逆算すれば、1208年に生まれたことになり、ジョチとオキ・フジンの婚姻は少なくとも1208年以前であることがわかる²⁸⁾。

この婚姻の持つ意味は、すでに指摘したように、ほぼ同時期である(2)のチグとトマルンの婚姻と組み合わせると、「姉妹交換婚」になることであり、この世代から両家の相互的な通婚関係がスタートした。通婚が相互的になったということは、双方が通婚の連続を期待するようになったことを意味する。

ただ、この「姉妹交換婚」からスタートする相互の通婚が、実際に連続したかどうかは必ずしもはっきりしない。ジョチの子孫のうち、とくに長子オルダの家系にはウングラト族出身の娘を娶った者が多い。また、チグの子孫には駙馬としてチンギス・カン家の娘を娶った者がいる。しかし、『集史』ジョチ・カン紀も『元史』諸公主表も、誰の娘を娶ったのかを記していないため、他の婚姻とどのようにつながるのかが全くわからない。従って、ジョチ家とチグ家の通婚関係がこれ以後連続したかどうかは、残念ながら確かめることができない。

史料の上で明らかに出来る重要な点は、ジョチ・ウルス（中央ウルス）を受け継いだバトゥ（オイラト族）が、オイラト族との姻戚関係を強め、ウンギラト族アルチ・ノヤン家との姻戚関係から遠ざかったことである。これは、チンギス・カン家内でアルチ・ノヤン家との姻戚関係をめぐって凌ぎ合いがあったことと関係があり、それについては別稿で論じたので、その要点を以下まとめておきたい（宇野 1993: 71-83）。

チンギス・カンの子の世代において、ジョチがアルチ・ノヤン家と姻戚関係を持ったことを上述したが、もう一人、ジョチのすぐ下の弟のチャガタイも、アルチ・ノヤンの父の兄弟の息子カダイ・ノヤンの娘イエスルンを、すなわちアルチ・ノヤンの父方のイトコの娘を娶った。イエスルンが死去すると、イエスルンの姉妹のトゲンを娶り、ソロレト婚を行った。このように、チンギス・カンの子の世代では、第1カトンのボルテから生まれた4人の息子のうち、年上のジョチとチャガタイが、母方の一族と姻戚関係を結んだのである。ところが、次のオゴデイ・カンの治世には、年下のオゴデイとトルイの家系が、巻き返しを図るように、アルチ・ノヤン家との相互の姻戚関係を結んだ。すなわち、チンギス・カンの孫の世代では、オゴデイの息子クチュがアルチ・ノヤンの孫カタカシを娶り、オゴデイの娘ソルカカンがアルチ・ノヤンの孫ノカに嫁いだ。そして、トルイの息子クビライが、アルチ・ノヤンの娘チャブイを娶り、トルイの娘イエス・ブカがアルチ・ノヤンの息子オチンに嫁いだのである。それと相反するかのようになり、年上のジョチとチャガタイの家系は、アルチ・ノヤン家との姻戚関係から遠ざかり、オイラト族のクドカ・ベキ家との姻戚関係を強めることになった。ジョチの息子バトゥの場合は、前章で述べたように、バトゥ自身がクドカ・ベキの息子トレルチの娘ベキを娶り、バトゥの姉妹クルイ・エゲチはトレルチの兄弟イナルチに嫁ぎ、バトゥの息子トクカンはトレルチの娘コチュを娶ったのである。

(4) クビライ (Qubilai) とチャブイ (Čabui) の婚姻 (図19, 史料S・T・U)

アルチ・ノヤンのもう一人の娘チャブイはトルイの息子クビライと結婚した。この婚姻は、上述のように、トルイ家がジョチ家に対抗してアルチ・ノヤン家との姻戚関係を結ぶために行った婚姻であるため、(2) (3) の「姉妹交換婚」とは連続していない。

この婚姻は、次の(5)と「姉妹交換婚」になっていることが重要であるが、それは次で述べるとして、ここでは、婚姻の時期を考察しておきたい。まず、チャブイとクビライから生まれた長子ドルジが、弟フレグの長子アバガより年上であり（『集史』クビライ・カン紀, JT/TS 1518: fol. 196b; Boyle 1971: 242）、アバガは1234年2月生

る。重要な点は、この婚姻が(4)のクビライとチャブイの婚姻と組み合わせると「姉妹交換婚」になることであり、これはトルイ家とアルチ・ノヤン家の以後数世代にわたる通婚関係のスタートとなった。

トルイ家とともにアルチ・ノヤン家と姻戚関係を強めていたオゴデイ家は、アルチ・ノヤン家出身のカタカンから生まれたシレムンをグユクの後継者として推したが、トルイ家の推すモンケに帝位を奪われると、カタカンは処刑され、オゴデイ家とアルチ・ノヤン家の通婚関係は1世代でおわる。一方、モンケの時代に、チンギス・カン家全体がオイラト族クドカ・ベキ家との姻戚関係を強めたため、以後、クビライ家のみがアルチ・ノヤン家との密接な姻戚関係を維持することになった(宇野 1993: 96-99)。

なお、クビライとオチンの間の「姉妹交換婚」は、形からみれば、クビライの子孫とオチンの子孫との間の相互の通婚関係として展開することが予想されるが、実際にはそうならず、オチンの死後、1257年にオチンの弟ナチンが万戸長の地位を継いだため、通婚の担い手はオチン家からナチン家に移り、以後、ナチン家とクビライ家の通婚関係として展開することになる。

(6) ナチン (Način 納陳) とセチェゲン (Sečegen 薛只干) の婚姻 (図19, 史料 R)

アルチ・ノヤンの息子であり、オチンの弟であるナチンは、セチェゲンを娶った。セチェゲンは、史料 R に「太祖孫女」とあり、チンギス・カンの孫むすめであることがわかるのみで、父親は不明である。もし、父親がトルイであれば、(4)のクビライの婚姻と組み合わせると「姉妹交換婚」となるが、トルイ以外のチンギス・カンの息子が父親であれば、「姉妹交換婚」ではなく、ナチンの姉妹とクビライのイトコとが交換されたことになる。後者の場合やや変則的ではあるが、クビライとナチンの間で同世代の女性が交換が行なわれたことにはなる。いずれにしろ、その「女性の交換」が相互の通婚関係のスタートとして意味を持つようになるのは、兄オチンが死去し、ナチンに万戸長の位が移ったときであった。万戸長の位が移動した結果、以後ナチン家とクビライ家の間で通婚が繰り返されていくことになり、この(4)と(6)の組合せは、クビライ家とナチン家の相互の通婚のスタートの意味を持つことになった。そのときの状況を、以下にもう少し詳しく述べておきたい。

まず、アルチ・ノヤンに始まるウンギラト族の万戸長の地位は、その子孫に世襲された。世襲した者は、多くの場合、それと同時にチンギス・カン家の娘を公主として娶る。しかし、ナチンの場合は例外であった。兄オチンが死去し、1257年にナチンが万戸長の地位を継いだとき、すでにナチンはセチェゲンと結婚しており、第三子マン

ジタイまでが生まれていた²⁹⁾。1257年は、モンケ・カン自身が南宋遠征に出軍した年であり、ナチンが参加する左翼軍は、モンケの率いる右翼軍より一步先に中国内地に向けて出発している(杉山 1982: 259-275)。オチンの死去した時期が残念ながらはっきりしないが、1257年という重要な年に、すでに駙馬であった弟のナチンは、兄の後を継いで万戸長となり、それから南宋遠征の左翼軍として出軍したのであろう。この時以後、万戸長の地位はナチン家へ移り、ナチンの子孫によって継承されることになるが、それとともに、通婚の担い手もナチン家に移り、連続的な通婚関係は、クビライ家とナチン家の間で展開することになったのである。

(7) オロチン (Oločin 斡羅眞) とオルジェイ (Öljei 完澤) の婚姻 (図19, 史料 Q・R)

ナチンの長子オロチンは、父ナチンの死後、万戸長の地位を継ぐとともに、オルジェイ公主を娶ったが、オルジェイの父親が誰であるかは史料に記されていないので、この婚姻の位置づけは不明である。

婚姻の時期は、父のナチンが1265(至元二)年まで生きていたことが確認できるので³⁰⁾、オロチンとオルジェイの婚姻はそれ以後である。オルジェイはまもなく死去し、オロチンは、オルジェイの代わりにナンギヤジン³¹⁾を娶った。1269(至元六)年には、すでにオロチンとナンギヤジンが結婚していたことを確認できるので³¹⁾、1265-69年の間に、オロチンとオルジェイの婚姻、オルジェイの死去、オロチンとナンギヤジンの婚姻が続けて起きたことがわかる。

(8) オロチンとナンギヤジン (Nangiyajin 囊加眞) の婚姻 (図19, 史料 Q)

オルジェイの死後、オロチンはクビライの娘ナンギヤジン³¹⁾を娶った。この婚姻は、クビライから見れば、妻チャブイのお返しとして、妻の兄弟の息子オロチンに、娘のナンギヤジンを嫁がせたことになり、「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」であることがわかる。なお、もしナンギヤジンがチャブイの産んだ娘であれば、この婚姻は「父方交叉イトコ婚」になるが、その点が不明のため「父方交叉イトコ婚」であるかどうかはわからない。

さて、この婚姻によって、オロチン家が万戸長の地位を獲得し通婚関係の担い手にもなった。パターン通り行けば、以後オロチン家とクビライの息子のチンキム家の間で通婚関係が展開するはずであり、実際次の世代までは、パターン通りに進むのであるが、そこでパターンは崩れてしまう。その原因は、オロチンとナンギヤジンの間に

男子が生まれないうちに、1277年のシリギの乱の時に、オロチンが弟のシルグガダイに殺されてしまい、オロチン家が絶えてしまったからである³²⁾。

(9) テムル (Temür 帖木兒) とナンギヤジンの婚姻 (図19, 史料 R)

オロチンが殺されてしまったため、弟のテムルが万戸長の地位を継ぐことになり、さらに、テムルはレヴィレート婚によって兄の妻ナンギヤジンを娶った³³⁾。このレヴィレート婚は、大変うまい方法であり、通婚の担い手を弟の家系にずらすだけで、通婚のパターンを崩さずにすんでいる。なぜなら、クビライから見れば、テムルもオロチンと同じく妻の兄弟の息子であるので、妻チャプイのお返しとして、妻の兄弟の息子テムルに娘のナンギヤジンを嫁がせたことになり、互酬の原理にもとづく通婚のパターンは維持されるからである。

(10) マンジタイ (Manjıtai 蠻子台) とナンギヤジンの婚姻 (図19, 史料 Q・R)

テムルが死去すると、1290(至元二七)年に弟のマンジタイが万戸長の地位を継ぎ、再びレヴィレート婚によってナンギヤジンを娶った。テムルとナンギヤダイの間には息子が2人生まれていたが、テムルが死去したとき、二人ともまだ幼かったために、再び弟の家系に万戸長の地位が移ることになった(史料Q)。この婚姻も、上の(9)の婚姻とまったく同じ方法であり、通婚のパターンを崩さず通婚を連続させるためである。

ただ、(9)の場合と異なるのは、ナンギヤジンが、初婚の時より20歳以上年を取っていたことであり、おそらく、そのためにマンジタイとナンギヤジンの間には子供が生まれなかったらしい。その結果、万戸長の地位がマンジタイの子孫に移ることはなかった。マンジタイが万戸長であった時期に、彼の甥のセンゲ・ブラ(マンジタイの兄テムルの息子)は成宗テムルの娘ブナ(普納)を娶ったのであり、この時点でテムル家の子孫が通婚関係の担い手となることが決まったと思われる(後述の(14)参照)。

(11) マンジタイとナンガブラ (Namyā-bura 喃哥不刺)の婚姻(図20, 史料 Q・R)

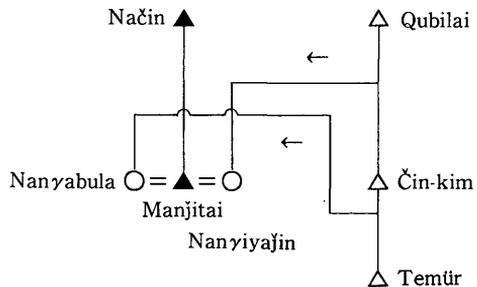


図20 チンギス・カン家とアルチ・ノヤン家の通婚関係(3)

マンジタイの妻ナンギヤジンは、1304年1月まで生きていたことを確認できるが³⁴⁾、その後死去した。ナンギヤジンの死後、マンジタイは、彼女の姪に当たる、チンキムの娘ナンガブラを彼女のかわりに娶った。すなわちソロレート婚である。この婚姻は、連続する通婚パターンからは、はずれている。

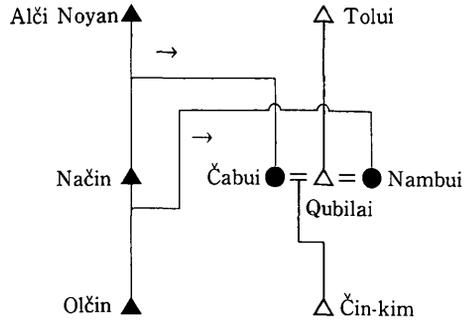


図21 チンギス・カン家とアルチ・ノヤン家の通婚関係 (4)

(12) クビライとナムブイ (Nambui 喃必) の婚姻 (図21, 史料 U・V)

クビライの皇后チャブイが、1281年3月20日に死去した後 (『元史』巻11), 1283年2月2日にクビライは、彼女のかわりに、チャブイの姪でありナチンの娘のナムブイ³⁵⁾を娶って皇后とした (『元史』巻12, 114)。これも、(11)の婚姻と同じくソロレート婚の事例であり、連続する通婚パターンからは、はずれている。

(13) 成宗テムル (Temür) とシリンドリ (Širindari 實憐答里) の婚姻 (図19, 史料 U・W)

チンキムの息子テムルは、オロチンの娘シリンドリを娶った。これは、交換のパターンとしては、オロチンが妻ナンギヤジンのお返しとして、妻の兄弟チンキムの息子に、自分の娘シリンドリを嫁がせたことになっており、「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」であり、ギブ・アンド・テイクの通婚パターンが連続している。ただ、シリンドリの父親オロチンが死去した1277年に、テムルがまだ13歳であったので、シリンドリとテムルの婚姻は、それより後である可能性が高く、オロチンが直接この婚姻に関わっていたわけではないだろう。おそらく、皇太子であった父親チンキムの死後、帝位獲得をねらうテムルが、帝位獲得に有利な条件をつくるために、父親の世代までの通婚パターンを崩さずにその姻戚関係を継承しようとして、また将来の皇后としてふさわしい家柄の女性としてシリンドリを選んだのではないかと思われる。なお、シリンドリは、ナンギヤジンの実の娘かどうかかわからないため、「父方交叉イトコ婚」であるかどうかは不明である。

ところで、史料Wの『元史』后妃伝1には、シリンドリが、成宗テムル即位後の大徳三 (1299) 年に后となり、徳壽を生んだと記されている。この記事は事実と反して

おり、シリンドリとテムルの婚姻が、成宗テムルの即位以前であることについては、すでに錢大昕の指摘があり、さらに徳壽を生んだのはシリンドリではなく、バヤウト族出身のブルガン・カトンであることについても韓儒林の指摘がある³⁶⁾。『元史』の記事は、シリンドリと徳壽に関して、意図的に事実を隠そうとしているように思われる。その理由として考えられるのは、徳壽が皇太子になった半年後に死去するという不自然な死に方をしていることからの推測ではあるが、徳壽の死をめぐる、アユルバルワダ（仁宗）とその母親ダギ側に隠蔽せざるを得ない事情があったのではないだろうか。

なお、シリンドリが成宗テムルに嫁いだのは、成宗即位以前のいつであるかが問題として残るが、シリンドリの婚姻は帝位継承とも絡んでいた可能性があり、その時期を確定するのは難しい。シリンドリの父親オロチンが死去した1277年は、テムルがまだ13歳のときであったので、シリンドリとテムルの婚姻は、それより後である可能性が高いであろう。

(14) センゲ・ブラ（桑哥不剌 Sengge-bura）とプナ（普納 Puna）の婚姻（図19，史料Q・R）

ウンギラト族テムルの息子センゲ・ブラは、成宗テムルの娘プナを娶った。婚姻の時期は、史料Qに「成宗時、奉旨尚普納公主（成宗の時、旨を奉りて普納公主に尚す）」とあり、成宗テムルの治世の間であったことがわかる。

この婚姻は、(13)の婚姻と組み合わせてみると、図19のように、成宗テムルが、妻シリンドリのお返しとして、妻の平行イトコ（シリンドリの父オロチンの弟テムルの息子センゲ・ブラ）に自分の娘プナを嫁がせたことになる。嫁がせた相手が、妻の兄弟の息子でなく、妻の平行イトコであるのはなぜだろうか。まず、妻シリンドリに兄弟がいなかったため、最適の対象がいなかったことが第1の理由である。第2の理由としては、成宗テムルの息子徳壽に姻戚関係を作るためであった可能性が考えられるが、これについては後述することにした。ともかく、世代のずれがあるにせよ、互酬の原理にもとづく通婚パターンが、ここまでは連続していたといえる。

ところが、通婚パターンの連続は、ここでいったん途切れる。それは、成宗テムルの死後、帝位継承が、成宗テムルの家系から兄の順宗ダルマバラの家系に移ったためであり、また、万戸長の地位も、センゲ・ブラでなく、兄のディウバラによって継承されたからである。

(15) ディウバラ (Diwubala 瑯阿不刺) とセンゲ・ラギ (Sengge-ragi 祥哥刺吉) の婚姻 (図19, 史料 Q・R)

ウングラト族テムルの長子ディウバラは、成宗テムルの兄ダルマバラの娘センゲ・ラギを娶った。この婚姻は、互酬の原理にはそっておらず、上の世代までの通婚パターンとは連続していない。この婚姻の特徴は、(14) の婚姻と婚出の仕方が似ていることである。その背景には、徳壽、その母親ブルガン・カトンと、カイシャン、アユルバルワダ、その母親ダギとの間の帝位継承をめぐる様々な政治的駆引きがあったことが想像される。当初、成宗テムルがレヴィレート婚を行ってダギを娶る計画があったが、これはブルガン・カトンの猛反対でつぶれた (杉山 1996: 170-174)。その後ダギは、なんとかして長子カイシャン、次子アユルバルワダに帝位継承にとって有利な条件をつくろうとしたと思われる。おそらくその一つとして、自分自身がウングラト族アルチ・ノヤン家の出身でもあるダギは、カイシャンの妹、アユルバルワダの姉に当たる娘センゲ・ラギを、当時のウングラト族の万戸長マンジタイの甥であり、マンジタイの妻ナンギャジンにとっては実の息子であるディウバラに嫁がせ、万戸長の家系との間に有利な姻戚関係をつくろうとしたのであろう。

ここでは、この婚姻の時期を論じておきたい。史料 Q の『元史』の記事には、

大徳十一年三月、按答兒〔禿〕長子瑯阿不刺 (ディウバラ) 襲萬戸、尚祥哥刺吉 (センゲ・ラギ)、六月、封大長公主、賜瑯阿不刺金印、加封魯王。

とあり、成宗テムルが死去した1307年2月10日 (大徳十一年正月癸酉) の直後に結婚したように書かれている。ところが、史料 Q には、ディウバラとセンゲ・ラギの息子アリギヤシリが、父親が死去した1310(至大三)年に数え八歳であったとあり、矛盾している。もし、後者が正しいとすれば、アリギヤシリが生まれたのは1303年であり、二人の結婚はそれ以前であったことになる。

『元史』武宗本紀では、史料 Q の「三月」に対応する記事は見あたらず、「六月」に対応する記事として、大徳十一年六月壬子 (1307年7月19日) の条に、「封皇妹祥哥刺吉 (センゲ・ラギ) 為魯國大長公主、駙馬瑯阿不刺 (ディウバラ) 為魯王」とあるのみであり、結婚のことは書かれていない。大徳十一年三月は、帝位を狙う党派がともに大都に集まり、もっとも政情の緊迫していた土壇場であったので、そのときになってディウバラがセンゲ・ラギを娶ったとは考えにくい。また、そのときセンゲ・ラギの兄の武宗カイシャンが27歳、弟の仁宗アユルバリパドラが23歳であるので、そ

のあいだのセング・ラギは24-26歳ぐらいであり、やや歳を取りすぎている。1303年には、20-22歳ぐらいであり、その方がふさわしい。以上は状況証拠にすぎないが、アリギヤシリは1303年に生まれた可能性の方が高く、二人の結婚はそれ以前であろう。

(16) 文宗トク・テムル (Toq-temür) とブダシリ (Budaširi ト答失里) の婚姻 (図19, 史料U・X)

武宗カイジャンの次子トク・テムルは、ディウバラとセング・ラギの間に生まれた娘ブダシリを娶った。この婚姻は、「父方交叉イトコ婚」であるが、交換のパターンとして見れば、ディウバラが、妻セング・ラギのお返しとして、妻の兄弟カイジャンの息子トク・テムルに、自分の娘ブダシリを嫁がせた婚姻、すなわち「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」であり、互酬の原理にもとづいた通婚パターンが復活していることがわかる。ただ、交換のパターンとしては上のような表現になるが、史料Qにあるように、ディウバラは、1310(至大三)年に死去しているので、1324年11月16日のトク・テムルとブダシリの婚姻³⁷⁾、ディウバラが直接かかわっていたわけではない。結婚当時の状況を見てみると、前年の1323年に、泰定帝イエスン・テムルが即位している。翌24年に、泰定帝は、英宗ンディバラによって海南島に流されていたトク・テムルをいったん大都に呼び戻して「懷王」に封じた。そのときに、当時21歳になるトク・テムルにブダシリを娶らせたのである。翌年正月に、トク・テムルは健康に居するよう命じられ、再び大都を離れた。

このように、トク・テムルの婚姻は泰定帝イエスン・テムルの主導で決まったが、そのときに、2つの家系間でギブ・アンド・テイクの「女性の交換」のパターンが生じるような結婚相手を選ばれたのである。花嫁の父親ディウバラはすでに死去していたが、その婚姻は、花嫁の父親からみて「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」であった。同じような状況が、(13)の成宗テムルとシリンドリの婚姻にもあり、婚姻が成立したとき、シリンドリの父親オロチンはすでに死去していた可能性が高いが、交換のパターンとしては、オロチンから見て「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」であった。

チンギス・カン家の縁組システムにおいてもっとも多く繰り替えされるこの交換婚は、交換のパターンとしては、花嫁の父親から見て「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる」のであり花嫁の父親を中心とするギブ・アンド・テイクの形を取っている。しかし、それは花嫁の父親の個人的なギブ・アンド・テイクではなく、両家のメンバーが集団として、通婚関係の成立と連続を期待するような集団間の「女

性の交換」である。従って、たとえ花嫁の父親が死去していても、姻戚関係が花嫁の世代に継承されることを両家のメンバーが望めば、あるいは決定権を握っている大カンが望めば、花嫁の父親を中心とするギブ・アンド・テイクの形を取って婚姻が行われるのである。

4.3. 小結

ウングラト族アルチ・ノヤン家とチンギス・カン家との通婚関係に関する以上の分析から、その通婚パターンの特徴について以下のようにまとめることができる。

(1) 相互的な通婚がスタートするときは、クドカ・ベキ家の場合と同じく、「姉妹交換婚」が行なわれている。

(2) 通婚パターンが連続する場合、「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」が行われることが多い。この点もクドカ・ベキ家の場合と同じであり、同一の縁組システムによる通婚関係であることがわかる。その基本的パターンを図示すれば、やはり図17のようになる。この互酬の原理は、花嫁の父親を中心とするギブ・アンド・テイクの形を取っているが、花嫁の父親の個人的なギブ・アンド・テイクではなく、あくまで集団間の「女性の交換」であるため、花嫁の父親が死去していても、両家のメンバーが花嫁の世代に姻戚関係が継承されることを望めば、あるいは大カンがそれを望めば、この交換婚は実現する。

(3) 「父方交叉イトコ婚」に当たる婚姻は、2例（チグとトマルン、トク・テムルとブダシリの婚姻）ある。一方、妻の母親が誰かわからないため、「父方交叉イトコ婚」か「父の姉妹の夫の別の妻の娘との婚姻」か判断できない例が4例（オロチンとナンギヤジン、テムルとナンギヤジン、マンジタイとナンギヤジン、テムルとシリンドリの婚姻）あり、「父の姉妹の夫の別の妻の娘との婚姻」とははっきりわかる例はない。そのため、アルチ・ノヤン家の通婚関係からは、「父方交叉イトコ婚」という解釈が不適切であることを積極的に示すことは難しい。

(4) 基本的には互酬の原理にもとづいているとはいえ、様々な政治状況の中で、通婚パターンの断絶と復活、通婚の担い手となる家の移動、世代のずれ、レヴィレート婚・ソロレート婚の混入などが起こっている。

(5) ソロレート婚が行なわれる場合は、ギブ・アンド・テイクの通婚パターンからはずれる。

5. チングス・カン家の縁組システムの特徴

5.1. なぜ「父方交叉イトコ婚」として解釈できないのか

以上の第3章・第4章において、チングス・カン家とクドカ・ベキ家、チングス・カン家とアルチ・ノヤン家の連続的な通婚関係の通婚パターンをそれぞれ分析した。その分析結果から明らかになったことは、この2つの通婚関係が、同一の縁組システムにもとづいており、「姉妹交換婚」でスタートし、以後「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」が行われ、ギブ・アンド・テイクの通婚が連続するということである。

この縁組システムが、他の要素の影響を受けずに純粋に機能した場合を想定して図示してみると、図17のようになる。第1世代では「姉妹交換婚」によって双方から二重の姻戚関係が結ばれ、第2世代以後は、どちらか片方からの一重の姻戚関係が結ばれる。婚出する方向は世代毎に互い違いに入れ替わり、相互に女性を交換する通婚パターンが生じることがわかる。しかし、これはあくまで理念的なモデルにすぎず、実際には、様々な政治状況、各世代の家族構成の変化などの制約の中で、通婚パターンの断絶と復活、世代のずれ、通婚の担い手となる家の移動、レヴィレート婚・ソロレト婚の混入など様々な要素を取り込みながら姻戚関係が維持されていくのであり、そのことは、クドカ・ベキ家、アルチ・ノヤン家の事例に見られる通りである。

さて、このチングス・カン家の縁組システムを「父方交叉イトコ婚」の繰り返しとはなぜ解釈できないかについて、第3章ですでに述べたがもう一度まとめておきたい。クドカ・ベキ家およびアルチ・ノヤン家との通婚関係を見てみると、一見、従来の縁組理論における「父方交叉イトコ婚」が繰り返されているかのようにみえる。確かに、部分部分を見れば、「父方交叉イトコ婚」になっている婚姻もあり、第3章・第4章で分析した通婚関係の中に、全部で7例の「父方交叉イトコ婚」（「類別的父方交叉イトコ婚」も含む）を見いだすことができる。しかし、当時のモンゴル社会に「父方交叉イトコ」と結婚しなければならないとか、結婚することが好ましいという「婚姻ルール」があったわけではない。当時のチングス・カン家の婚姻を見ただけでも、「父方交叉イトコ婚」ではない婚姻はたくさんある³⁸⁾。

チングス・カン家の縁組システムでは、2家系間の通婚関係をスタートさせるために、さらにはそれを世代を越えて継承させていくために、通婚関係の担い手となる男

が、2家系間のギブ・アンド・テイクの「女性の交換」となるような婚姻を行うのである。それが結果的に「父方交叉イトコ婚」になっている場合もあるが、ならない場合もある。当時のモンゴル社会は一夫多妻制であったため、チンギス・カン家の男はたいてい複数の妻（カトンや側室）を娶っている。クドカ・ベキ家あるいはアルチ・ノヤン家から娶った妻のお返しとして、それ以外の部族・家系出身の妻から生まれた娘を嫁がせても、「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」であることに変わりはなく、ギブ・アンド・テイクの通婚パターンを連続させることはできる。その婚姻は、夫から見れば「父の姉妹の夫の別の妻の娘との婚姻」であり、「父方交叉イトコ婚」ではない。第3章で指摘したように、図13のチョバンとノムガンの婚姻、図14のトク・テムルとエブゲンの婚姻がそれにあたる。図から明らかのように、ギブ・アンド・テイクの通婚パターンがきれいに連続していることがわかる。

ただ、その際に、名門姻族から娶った妻から生まれた娘と、それ以外の妻から生まれた娘の両者がいた場合、その姻族にお返しに嫁がせる娘として、どちらが好ましいか、あるいは「父方交叉イトコ婚」が連続すると血が濃くなりすぎるという理由で好ましくないという判断があったかどうかについては、データが少ないためによくわからない。今のところ、はっきりしていることは、どちらでもギブ・アンド・テイクの通婚パターンは連続し、姻戚関係を次世代に継承することができるということである。

以上の理由から、チンギス・カン家の縁組システムを「父方交叉イトコ婚」として解釈することはできないと考える。「はじめに」で述べたように、すでに人類学の最近の研究では、マッキノンが、タニンバル諸島の婚姻縁組のシステムについて、これを「母方交叉イトコ婚」として解釈するのは無理であり、そのように縁組システムを「婚姻ルール」で規定された近親婚の1タイプによって解釈するのではなく、「女性と婚資の交換」という視点から解釈すべきであると主張している。

モンゴル帝国とタニンバル諸島のどちらの縁組システムにも共通していることは、その社会に特定の「婚姻ルール」は存在しなくても、彼らにとって重要な姻戚関係があり、それを形成し世代を越えて維持したい場合には、要所要所でそれに必要な婚姻が行われるということである。それが、結果的に「母方交叉イトコ婚」「父方交叉イトコ婚」になることはあるが、そこだけを見ても縁組システム全体を理解することはできないのである。

5.2. 「女性の交換」の担い手となる集団

従来の研究の中でしばしば議論されてきた問題として、交換の担い手はどのような

集団かという問題がある。周知のように、かつてリーチは、カチン族の交換の担い手となる集団は、外婚集団としてのクランではなく、居住地域を同じくする、3世代ぐらいからなる出自集団であると論じた（リーチ 1974: 109-110, 146, 172; 1987: 84-95）。

チンギス・カン家の縁組システムの場合は、交換の担い手はさらに小さな単位であり、「家」といった方が適切であるように思う。この縁組システムのパターンにもとづいて、ある男が妻の兄弟の息子に自分の娘を嫁がせる場合を考えると、もし妻の兄弟やその息子が複数であれば、娘が嫁ぐ相手を決めるのにある程度の選択の幅がある。その複数の候補の中から一人を婿として選ぶということは、それは、以後の通婚関係がその婿の子孫との間で行なわれることを意味する。様々な政治状況のもとで、実際にその通りになるかどうかはまた別問題であるが、少なくとも、その婿の子孫との間で通婚関係が展開することを、双方が期待することになる。つまり、この縁組システムのもとでは、縁組が結ばれるたびに、枝分かれする婿側の複数の「家」の中から一つの「家」を選択する過程が自動的に進むのである。

例えば、図14・15のチンギス・カン家とクドカ・ベキ家の通婚関係では、チンギス・カンの娘チチェゲンが、クドカ・ベキの息子トレルチに嫁いだため、以後トレルチの子孫との間で通婚関係が展開することになった。次世代では、トレルチの娘のうち、クイクがトルイの息子フレグに嫁ぎ、クイクの死後は、オルジェイがフレグに嫁いだ。一方、フレグの弟アリク・ブケには、トレルチの娘のうち、エル・チクミシが嫁いだ。そのため、ここで通婚関係が枝分かれし、トレルチの子孫は、フレグの子孫、アリク・ブケの子孫との間に、別々に通婚関係を展開することになる。その分岐に対応してトレルチの子孫も分かれ、トレルチの息子たちの中から、ブカ・テムルがフレグに結びつき、バルス・ブカがアリク・ブケに結びついた。ブカ・テムルは、フレグ、オルジェイとともにイランに行き、イルカン国のメンバーとなり、以後、ブカ・テムル家とフレグ家との通婚関係がもう2世代続く。一方、バルス・ブカはモンゴル高原に残り、バルス・ブカ家は、モンゴル高原の牧地を相続した末子の系統のアリク・ブケ家と通婚関係を続けることになった。

このように見てくると、チンギス・カン家の縁組システムの場合、通婚関係の担い手、「女性の交換」の担い手は、数世代からなる出自集団というよりむしろ「家」である。そして重要な点は、姻族の複数の兄弟うちの一人に娘を嫁がせるたびに、その婿の子孫が通婚関係を担う「家」として選択されることであり、そのような「家」の選択を相互に繰り返しつつ、通婚関係は連続していくのである。

5.3. チンギス・カン家の縁組システムにおける母方の親族関係

チンギス・カン家の縁組システムにおいて、「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」が繰り返されるといことは、親族関係の上にどのような影響を与えるのであろうか。

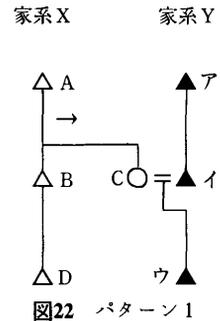
まず、姻戚関係と母方の親族関係がどのように関連するかを確認しておきたい。普通、ある男の姻戚関係というと、その男と妻の一族との関係、あるいは嫁いだ娘の夫の一族との関係、あるいは嫁いだ姉妹の夫の一族との関係を意味する。そして、2つの集団が姻戚関係を結ぶというと、まず第一に、一方の集団に属する男にとってのこのような関係を想起する。たとえば、図19のクビライにとっての姻戚関係とは、妻チャブイの一族、娘ナンギヤジンの夫オロチン（および再婚相手のテムル、マンジタイ）の一族との関係である。

ところが、ある世代の姻戚関係は、次の世代にとっては必ず母方の親族関係になる。たとえば、クビライの息子チンキムにとって、母チャブイの一族は母方の親族であり、ナチンは母方のおじ、オロチン、テムル、マンジタイは母方の交叉イトコである。そして、チンキムの姉妹のナンギヤジンが、このオロチン、テムル、マンジタイと結婚した結果、チンキムにとって、母方の親族関係に姻戚関係（姉妹の夫の一族との関係）が重なったことになる。一方、ナンギヤジンとテムルとの間に生まれディウバラにとっては、クビライ、チンキム、テムル（成宗）、ダルマバラが、母方の親族である。そして、ディウバラは、ダルマバラ（母方の交叉イトコ）の娘センゲ・ラギを娶ったので、母方の親族との間に姻戚関係を重ねたことになる。

このように、2集団間で通婚が繰り返されれば、姻戚関係のみならず母方の親族関係を繰り返し生み出していくことになる。チンギス・カン家に嫁いできたカトンたちが、妻としてより母として権力を握ったことを考えると、この縁組システムのもとで、どのような母方の親族関係が生じるかは、この縁組システムを考える上で重要な点であると思われる。そこでこの点をもう少し詳しく分析してみたい。

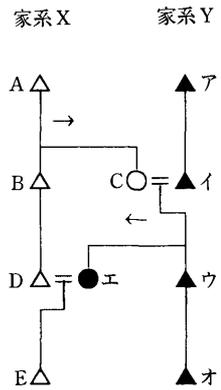
まず最初に、「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」が繰り返された場合、どのような母方の親族関係が生じるかを、図22、図23の上で考えてみたい。

図22のように、家系Xから家系YへCが嫁ぎイと結婚すると、両家の間に姻戚関係が生じ、イとCから生まれた男



子ウにとって、家系Xの男性A、B、Dは、母方の親族となる。すなわち、ウにとって、Aは母の父、Bは母の兄弟、Dは母方の交叉イトコである。逆に、ウは、Aにとって娘の息子、Bにとって姉妹の息子、Cにとって父方の交叉イトコである。これらの関係の中では、もっとも血縁関係が近いのはウとBの関係であり、この関係は、人類学においてはやくから注目されてきた「オジ（母の兄弟MB）とオイ（姉妹の息子ZS）の関係」である^{39）}。

次に、図23のように、イが、妻Cの兄弟の息子Dに、お返しとして娘エを嫁がせる場合を考えてみよう。この婚姻に



より、ウとその母方の親族であるA・B・Dとの間に、Dとエの婚姻を介した新たな姻戚関係が生じる。そして、Dとエから男子Eが生まれると、こんどはEにとってア・イ・ウ・オが母方の親族となり、Eにとって、イは母の父、ウは母の兄弟、オは母方の交叉イトコとなる。この中では、やはりEとウの「オジ（母の兄弟）とオイ（姉妹の息子）の関係」が最も血縁関係が近い。このようにして、上のイとCの婚姻によって生じた母方の親族関係を完全に反転した関係が1世代下に生じたことになる。さらにもう1世代連続すれば、再び反転してもとに戻る。

以上のように、2つの家系の間には、この通婚パターンが続く限り、反転を繰り返しながら、世代毎に、全く同じ母方の親族関係が再生産されていくのである。母方の親族の中で最も血縁関係の近い「オジ（母の兄弟）とオイ（姉妹の息子）の関係」をたどってみれば、B-ウ、ウ-Eと連続していることがわかる。また、両家系とも複数の男子が生まれれば、各世代毎に分岐を繰り返すので、この通婚パターンは、世代毎に分岐をしつづける2つの家系の間で、家系XからA-B-D-E、家系Yからア-イ-ウ-オという父系ライを選択しつつ、その2本の直系父系ラインの関係を、最も近い母方の親族関係に維持しつづけていることになる。この一定の母方の親族関係の維持こそが、この縁組システムの意味を考える上で重要な点である^{40）}。

そこで、具体例を挙げてみよう。図24のように、チンギス・カンの娘チチェゲンが、トレルチに嫁いだ例を考えてみると、この婚姻により、クドカ・ベキ家とチンギス・カン家の間に姻戚関係が生じる。そして、トレルチとチチェゲンから生まれたブカ・テムルおよびその兄弟にとって、チンギス・カン、トルイ、フレグ、アリク・ブケらは、母方の親族となる。すなわち、ブカ・テムルにとって、チンギス・カンは母の父、トルイは母の兄弟、アリク・ブケ、フレグは母方の交叉イトコである。

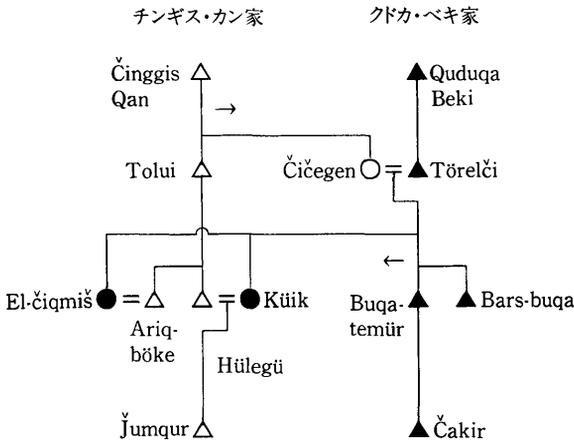


図24 チンギス・カン家とクドカ・ベキ家の通婚関係 (11)

次の世代では、トレルチが、妻を娶ったお返しに妻の兄弟の息子たちに自分の娘を嫁がせた。トレルチの娘のクイクは、トルイの第三子フレグに嫁ぎ、もう一人の娘エル・チクミンは、第四子アリク・ブケに嫁いだ。その結果、上述の母方の親族の関係に重ねてあらたな姻戚関係が生じ、次の世代では、反転した母方の親族関係が再生産された。すなわち、フレグとクイクから生まれたジュムクルにとってトレルチ、ブカ・テムル、チャキルらは母方の親族であり、トレルチは母の父、ブカ・テムルは母の兄弟、チャキルは母方交叉イトコである。最も血縁関係の近い「オジ（母の兄弟）とオイ（姉妹の息子）の関係」をたどってみると、トルイーブカ・テムル、ブカ・テムル—ジュムクルと連続している。それに対して、アリク・ブケとエル・チクミンの場合は、二人の間に男子が生まれなかったので、母方の親族関係は再生産されなかった。これについては、後でもう一度言及したい。

このように、フレグとクイクの婚姻は、次世代で反転した母方の親族関係を再生産し、それによって、チンギス・カン—トルイーフレグという直系父系ラインと、クドカ・ベキ—トレルチ—ブカ・テムルという直系父系ラインの関係を、最も近い母方の親族関係に維持したまま、もう1世代伸ばしたことになる。それと同時に、通婚関係の担い手となる「家」を選択しあう過程も進んでおり、ブカ・テムル家は、枝分かれするチンギス・カン家の中からトルイ家、そのなかでもフレグ家を選択し、一方、フレグ家も、枝分かれするクドカ・ベキ家の中のトレルチ家、さらにその中のブカ・テムル家を選択したことがわかる。

以上のように、この縁組システムのもとでギブ・アンド・テイクの「女性の交換」は、2本の直系父系ラインの関係を、母方において最も近い親族関係に維持している。

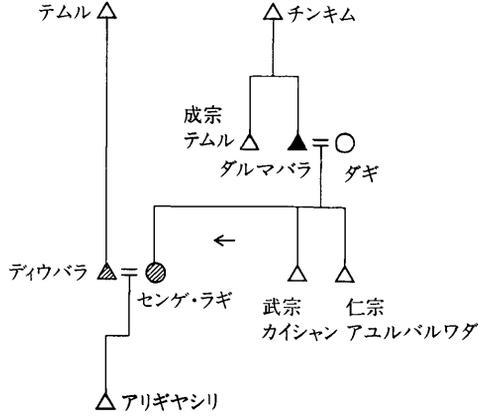


図26 チンギス・カン家とアルチ・ノヤン家の通婚関係 (6)

ビライが母の父，チンキムが母の兄弟，成宗テムルが母方の交叉イトコである。その1世代上では，チンキムにとって，アルチ・ノヤンが母の父，ナチンが母の兄弟，テムルが母方の交叉イトコであったので，その反転した母方の親族関係が，再生産されていることがわかる。このようにして，ナンギヤジンとオロチンの間に男子が生まれなかった事態は，うまく回避された。

第2は，図25の成宗テムルとシリンドリである。第4章で述べたように，シリンドリは成宗テムルの即位以前に若くして死去しており，徳壽は成宗テムルとバヤウト族出身のブルカン・カトンの子であり，シリンドリの子ではなかった。従って，徳壽にとってアルチ・ノヤン家は母方の親族ではない。徳壽の世代は，通婚パターンの順番からすればアルチ・ノヤン家出身の母親から生まれた者が帝位を継ぐべき世代であるが，成宗テムルとシリンドリは，なんとか徳壽に帝位を継がせるために，娘のプナ（徳壽にとっては姉妹にあたるが母親は不明）をアルチ・ノヤン家のテムルの息子センゲ・ブラに嫁がせた。これは，成宗テムルが妻シリンドリのイトコに娘を嫁がせるというやや変則的な婚姻である。この縁組の目的は，徳壽とアルチ・ノヤン家の間に姻戚関係をつくることであろう。この婚姻の結果，徳壽はセンゲ・ブラにとって妻の兄弟になった。さらに，センゲ・ブラとプナから男子が生まれれば，その子からみて徳壽は母の兄弟になり，徳壽が母方の親族にうまく組み込まれることになる。しかし，実際には，徳壽が皇太子になるや否や死去したため，センゲ・ブラとプナの婚姻は意味を失ってしまった⁴¹⁾。

一方，センゲ・ラギの婚姻にパターンが非常に似ているディウバラとセンゲ・ラギの婚姻（図26）は，成功例である。第4章で述べたように，この婚姻も，チンギス・

カン家のカイシャン、アユルバルワダ兄弟と、アルチ・ノヤン家の万戸長の家系との間に姻戚関係を作ることが目的であった。結婚後に、ディウバラとセング・ラギにアリギヤシリが生まれたため、カイシャンとアユルバルワダ兄弟は、その母方のおじになり、二人はアルチ・ノヤン家の母方の親族にうまく組み込まれたことがわかる。武宗カイシャンの治世に万戸長となったのは、このディウバラとアリギヤシリ親子であった（『元史』巻118）。

第3は、図13・14のアリク・ブケとエル・チクミンである。エル・チクミンには男子が生まれず、アリク・ブケの息子メリク・テムルはエル・チクミンが産んだ子ではなかった。これに対する対処の仕方は、2つに分かれた。まず、図13のように、エル・チクミンの兄弟のうちブカ・テムル家では、ブカ・テムルの息子のチョバンがアリク・ブケの娘のノムガンを娶り、通婚関係を連続させた。これは、通婚パターンとしては交互の女性の交換になっており、互酬の原理にそってきれいに連続したように見える。しかし、アリク・ブケの後を継いだメリク・テムルにとって、ブカ・テムルやチョバンは母方の親族ではなく、メリク・テムルの世代では、母方の親族関係が生じていない。状況から考えると、ブカ・テムル家が積極的に通婚関係をもったのは、図15のようにフレグ家の方であり、ブカ・テムル自身も上述のようにフレグとともにイランに行ってしまった。従って、おそらくアリク・ブケ家との関係はあまり重要ではなかったのであろう。通婚関係もこの代で途絶えている。

一方、エル・チクミンの兄弟のうちバルス・ブカ家は、図14のように、バルス・ブカが、アリク・ブケの姉妹のエル・テムルを娶って「姉妹交換婚」を行い、さらに次の世代では、お返しにバルス・ブカの娘エメゲンをメリク・テムルに嫁がせることによって通婚関係を連続させた。「姉妹交換婚」をはさみながら、全体としてギブ・アンド・テイクの互酬の原理にもとづく通婚パターンがまもられていることがわかる。

この「姉妹交換婚」は、母方の親族関係が崩れるのをうまく回避している。つまり、バルス・ブカとエル・テムルから男子が生まれれば、メリク・テムルはその母方の交叉イトコとなるので、メリク・テムルの世代でも、2つの直系父系ラインの関係は、最も近い母方の親族関係に維持されることになる。ただし、この場合、それが実現したことを証明するのは難しい。なぜなら、バルス・ブカの2人の息子が、エル・テムルから生まれた子供であるかどうかはわからないからである。『集史』によると、バルス・ブカには Šīrap (<Shīrāp), Beklemiš (<Biklemīsh) という2人の息子がいたというが (JT/A1: 226), その二人の母親についての記載はない。また、そのうちどちらがトク・テムルの父親であったのかもわからない。従って、はたして母方の親族

関係が崩れるのを回避できたかどうかはわからない。

しかし、バルス・ブカが、エル・テムルを娶ったお返しに、メリク・テムルに娘エメゲンを嫁がせたことにより再度姻戚関係が築かれ、二人から男子も生まれた。その結果、バルス・ブカとその子孫は、その男子の母方の親族となり、両家の直系父系ラインは、最も近い母方の親族関係に維持されたのである。

以上の分析を要約すれば、「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」を繰り返すこの縁組システムは、各世代毎に反転する母方の親族関係を生み出すことにより、2つの直系父系ラインの関係を、母方において最も近い親族関係に維持することができる。ただしその場合に、嫁いできた女性から通婚関係の担い手となる男子が生まれる必要がある。男子が生まれなかった場合は、上述の3例のように、なんらかの処置をする必要がある。

6. 結 論

チンギス・カン家の縁組システムは、ギブ・アンド・テイクの女性の交換を行う「対称的婚姻縁組」が、持続する姻戚関係を形成した実例であり、人類学の縁組理論にとって貴重な実例である。「非対称的婚姻縁組」については、マッキノンの近年の研究に至るまで多くの蓄積があり、「非対称的婚姻縁組」の場合、どのようにして姻戚関係が形成され持続するかについてかなり解明されている。しかし、「対称的婚姻縁組」については、チンギス・カン家の縁組システムのように5～6世代にわたって持続的な姻戚関係が形成される実例は報告されていなかった。

かつてレヴィ＝ストロースは、『親族の基本構造』の中で「父方交叉イトコ婚」について分析し、「父方交叉イトコ婚」のような世代をずらせたギブ・アンド・テイクの女性の交換は、「上の世代で女が譲渡され、次の世代で女が獲得され、かくしてこの体系は再び不活性の状態に戻るのである」と述べ、「閉じられた構造」「非連続的な交換」であると論じた(レヴィ＝ストロース 1978: 776-777)。レヴィ＝ストロースが想定したのは、3集団以上の間で「婚姻ルール」として「父方交叉イトコ婚」を行った場合である。以後、世代をずらせたギブ・アンド・テイクの女性の交換は、持続する姻戚関係を形成することはないと思われてきた。

チンギス・カン家の縁組システムは、レヴィ＝ストロースが想定した状況とは異なるが、「妻の兄弟の息子に自分の娘を嫁がせる婚姻」という世代をずらせた女性の交換によって、2集団間に持続的な姻戚関係を形成した。その点で、人類学の縁組理論

にとって興味深い事例である。

最後に、前章までの分析により明らかになったことをまとめておきたい。

チンギス・カン家の縁組システムは、第1世代では、姉妹交換婚により相互の通婚関係をスタートし、第2世代からは、「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる婚姻」により、互酬の原理にもとづいて、女性を交互に交換するシステムである。後者の通婚パターンは、「父方交叉イトコ婚」に類似しているが、「父方交叉イトコ婚」でなくてもこのパターンになりうるので、「父方交叉イトコ婚」として解釈することはできない。

この通婚関係がスタートすると、通婚関係を結ぶ2つの集団の男性メンバーは、互いに姻族としての絆で結ばれる。その姻戚関係は、次世代では母方の親族関係に変わる。上述の通婚パターンが繰り返されると、姻戚関係と母方の親族関係が重なりあい、2集団間に密接な絆が生じる。ただし、母方の親族関係が生じるためには、姻族から嫁いできた女性が産んだ男子が、通婚関係の担い手にならなければならない。女性の婚出する向きは、世代ごとに入れ替わるので、それによって生ずる母方の親族関係も世代ごとに反転し、世代をずらせながら交互に母方の親族になりあうことになる。その結果、通婚を繰り返す2集団の直系父系ラインの間では、「オジ（母の兄弟）とオイ（姉妹の息子）の関係」という最も近い母方の親族関係が再生産されつづけ、2集団間の安定した絆が世代を越えて維持されていく。

モンゴル帝国時代に、チンギス・カン家は、一族内で激しい帝位継承争いを繰り返していた。そのチンギス・カン家にとって、姻族は、父系親族以上に信頼できる味方であった。この縁組システムは、姻族との安定した政治的関係を支えるために、チンギス・カン家と姻族の間に、姻戚関係と母方の親族関係を世代を越えて維持する役割をはたしていたのである。

謝 辞

本稿は、国立民族学博物館共同研究「遊牧の歴史と現在」（研究代表者：松原正毅）の共同研究会（1991年1月）において発表したものをもとにしており、松原正毅、小長谷有紀両氏をはじめ、共同研究会の諸氏より、多くの有益なアドバイスをいただき、発表後さらに分析を深めることができた。また、研究を進めるに当たって、学友である早稲田大学の柳沢明氏との忌憚のない議論にも多くを負っている。これらの諸氏に謝意を表したい。

註

- 1) この部族名は、Onggirat/Onggirad～Qonggirat/Qonggirad とローマナイズされることが多い (Pelliot 1949a: 29; 1963: 869; Rachewiltz 1972: 280など)。これは、当初、『元朝秘史』の「翁」が“Ong”と転写されていたためであるが、『元朝秘史』では、「翁 Ung」と「汪 Ong」は区別されているので、クリーブス、小沢両氏の近年の訳注では、Unggirad と転写されている (Cleaves 1982: 269; 小沢 1984: 260; 1987: 95, 102, 353 など)。クリーブスによると、ウイグル式モンゴル文字の綴りは Qungyirad である (Cleaves 1950: 13)。従って、やや耳慣れないが、本稿では「ウンギラト」で統一することにする。

なお、モンゴル帝国時代のモンゴル語の人名・地名などは、ウイグル式モンゴル文字の表記 (またはアラビア語・ペルシア語史料中の綴りから推定されるウイグル式モンゴル文字の表記) と『元朝秘史』『華夷訳語』など漢字転写された表記の間に違いがあり、どちらかに統一するのはかなり困難である。そこで、本稿では、利用した史料に基づいてそのどちらかを記した。
- 2) 人類学者によるモンゴルの婚姻に関する研究としては、ブリーランドが、現代モンゴルの親族名称体系について分析した中で、現代のモンゴルの婚姻にも言及している (Vreeland 1954)。しかし、モンゴル帝国時代の婚姻システムについて分析したものは少なく、現代およびモンゴル帝国時代の社会組織について研究したエリザベス・ベーコンが、婚姻制度についても若干言及しているにすぎない。ベーコンは其中で、13-14世紀のモンゴルでは、「母方交交イトコ婚」が行われ、「父方交交イトコ婚」は行われていなかったと述べている (Bacon 1958: 59-61)。しかし、文献資料から「父方交交イトコ婚」の事例を挙げることは容易であり、「父方交交イトコ婚」も行なわれていたことは確実であり、ベーコンがそのような結論に達したのは、文献史料を十分に利用しなかったからにすぎない。
- 3) 『元朝秘史』239節には Čečeyigen とある。本稿では、『集史』のアラビア文字の綴り Jijākān から予想されるウイグル式モンゴル文字の綴り「チチェゲン Čičegen」(Hambis 1954: 122) を用いることにする。
- 4) 『元朝秘史』239節には, Törölci とある。上と同様に、『集史』のアラビア文字の綴り Tūrālji から予想されるウイグル式モンゴル文字の綴り「トレルチ Törelči」(Hambis 1954: 122) を用いることにする。
- 5) 例外的な婚姻として、ウイグル王火赤哈兒的斤が、チャガタイ家のドアに城を囲まれたとき、娘を要求されて、やむなくドアに与えたことがある (『元史』卷122, 巴而朮阿而忒的斤伝; 佐口 1943: 996)。
- 6) ウイグル族、オングト族との通婚関係が一方的であったことは、この2部族がトルコ系であることと関係があるかもしれない。クビライの時代に姻族となった高麗王家との通婚関係も、1例を除き、チンギス・カン家から婚出するだけの一方的なものであった。
- 7) 主要な姻族の配置について触れておきたい。モンゴル高原を中心として見てみると、オイラト族は北方、ウイグル族は西方、オングト族は南方に位置し、ウンギラト族とイキレス族は、興安嶺西麓から東南方にあたる熱河方面に移住させられた。このように、モンゴル高原をぐるりと取り囲むように姻族が配置されたことは、チンギス・カンの軍事的な配慮があっ

たことを思わせる。ただ、絶え間ない征服戦争により領土が拡大するにつれ、この配置の当初の軍事的な意味は失われたであろう。

- 8) これについては母方交叉イトコ婚（非対称的婚姻縁組）に関する次のキージング、リーチの見解が参考になる。「(ビルマのカチン族、アッサムのブルム族の) いずれの場合も、婚姻は政治交渉や地位獲得の手段となる。各世代の少数の婚姻のみがリネージの政治的地位を維持するのに役立つ。その他の婚姻はさして重要でなく、なかには必ずしも婚姻規則に従う必要のない社会もある」(キージング 1982: 149)。「(カチン族のマユ・ダマ規則について) 各世代ごとに少なくとも一組の形式規則に従う婚姻が成立すれば、関係は十分維持されるのだった」(リーチ 1987: 88)。
- 9) 従来から指摘されているように(村上 1972: 104), コジン・ベキを与えようとした相手は、『元朝秘史』と『聖武親征録』では「トサカ」「禿撒合」とあるが、『集史』ではトス・ブカ(またはブス・ブカ)とあり、異なっている。ここでは、『元朝秘史』『聖武親征録』に従っておく。

是時上與太子朮赤(ジョチ)求聘汪可汗(オン・カン)女抄兒伯姬(チャウル・ベキ)。汪可汗之孫禿撒合(トサカ)亦求上公主火阿眞伯姬(コジン・ベキ), 俱不諧。自是稍疎。(『聖武親征録』)

年上の娘のコジン・ベキ *Qūjīn-bīkī*。最初、彼女を、オン・カン *Ūnk Khān* の孫であり、セングン *Senkūn* の息子であるトス・ブカ *Tūs-būqā* のために求めた。その結婚は実現しなかった。そのために、間にきまざさが生じた。(『集史』チンギス・カン紀, JT/TS 1518: fol. 65a)

(戊年) その冬、チンギス・カンは、セングン *Senkūn* の姉妹のチャウル・ベキ *Jāwūr-bīkī* を、自分の最年長の息子のジョチ・カン *Jūjī Khān* のために求めていた。オン・カン *Ūnk Khān* は、チンギス・カンの娘のコジン・ベキ *Qūjīn-bīkī* を、セングンの息子のトス・ブカ *Būs-būqā* のために求めたが、その事(結婚)は進まず実現しなかった。そのために、彼らの中で気まざさが少し生じた。(『集史』チンギス・カン紀, JT/TS 1518: fol. 81b-82a)

- 10) この2組の結婚は、結局計画だけに終わってしまったので、姉妹交換婚ではなく、このように片方が1世代ずれている場合、通婚関係が連続し得るかどうかは推測するしかない。理屈の上では、ジョチの息子がトサカの娘と結婚すれば、相互の通婚が次世代に連続することになる。
- 11) *anda* は、トルコ語の *and* (誓い) に由来する借用語であり、父系出自集団を異にする者同士が、互いに貴重な物を交換し合って政治的協力関係を誓った場合、互いに相手を *anda* と呼び合う(村上 1970: 158; 磯野 1985)。 *quda* は、ある男からみて、子供の配偶者の父親(娘の夫の父親、または息子の妻の父親)を指すモンゴル語の親族名称であり、広くは男性の姻族を指す(Bacon 1958: 62, 114; 村上 1970: 91-92; 拿木四来 1989: 118)。この2語を合体させた「アンダ・クダの (*andā qūdāi*)」という表現は、『集史』に数回用例があり、オイラト族とチンギス・カン家の姻戚関係に関するこの用例のほか、チンギス・カンの祖先のカブル・カンとウングラト族との姻戚関係に関する用例などがある。さらに、この *andā qūdāi* に対応するモンゴル語の用例として、「大元勅賜追封西寧王忻都公神道碑」のモンゴル文中

に、やはりチンギス・カン家と通婚関係があったウイグル王家のイディ・クトについて「アンダ・クダとして姻族になり合ったときから (anda quda uruy barilduysan aca) 今に至るまでの長い間恩賜されてきたことの理由といえは」という用例がある (Doerfer 1963: 150-151, 424; Cleaves 1949: 62, 84, 102)。これらの用例からみて, anda quda および andā qūdāi は, チンギス・カン家とウンギラト族, オイラト族, ウイグル族などとの姻戚関係のように, 連続的な通婚が行われた場合に, その姻族および姻戚関係を指して用いられていると考えられる。

- 12) アリー・ザーデの校訂本には Qūrālji (JT/A1: 222) とあるが, トプカプ・サライ本 (JT/TS 1518), テヘランの国民議会付属図書館所蔵写本 (JT/KMSM 2131) に従って Tūrālji とする。
- 13) オグル・トトミシ Oyul-tutmiš. この人名は, 史料 A には, Oyul-quimiš (Oghül-qūmish), 史料 E には, Oyul-tutmiš (Üghül tütmiş) とある。前者は, 写本によってばらつきが大きく, 後半部分は, qūmish (JT/TS 1518) 以外に, qūtmish (JT/Saltykov), qutmish (JT/BL 7628), qūtmish (JT/KMSM 2131) のように, i の部分が t であり, 後者に近いものも多い。さらに, 岡田氏が指摘しているように, 前者はメルキト族の Oyul-qaimiš と混同された可能性が高い (岡田 1974: 5)。従って, 後者の Oyul-tutmiš を正しい名前と考える。
次に, 岡田氏は, 史料 A に, オグル・トトミシが, 夫モンケ・カンの弟であるクビライやフレグを「息子」と呼んだ理由について, クビライやフレグの嫁がオグル・トトミシの姪であったためと推測した (岡田 1974: 5-6)。しかし, 史料 E に「トルイの婚約者」とあることから明らかのように, オグル・トトミシがクビライやフレグを息子と呼んだのは, モンケと結婚する前に, 一度父親のトルイと婚約していたためである。
- 14) Ūrqana (AWRQNH) は, ここではベリオに倣って, Oryana または Uryana と解釈し, 「オルガナ」と読むことにするが, 「オルクナ」とも読める (Pelliot 1973: 114)。
- 15) クイク・カトン Küik Qatun を指す。クイク・カトンは, トレルチの娘であり, フレグに嫁ぎカトンとなった人物であるが, その名前は, 史料 A には, Kūbāk Khātūn とあり, 史料 F には, Kūik Khātūn とあり, くい違いがある。前者は一例のみであるが後者は 6 例あり, そのうち 4 例まで, 第二子音が y であることを確認できる。従って, ここでは Küik Khātūn の方を採用し, クイク・カトン Küik Qatun と呼んでおく (宇野 1993: 101, 注14)。
- 16) Buqa-temür の姉妹について。史料 A では, ラシード自身が 2 つの伝承を記している。一つは, Öljei Qatun と Möngke-temür の母親 (Köcü Qatun) の二人が, Buqa-temür の孫とする伝承であり, もう一つは, Buqa-temür の姉妹とする伝承である。ラシードは両者を挙げた上で, 後者を正しいと記しており, 史料 F のフレグ・カン紀の記事も後者に一致する。岡田氏が, 後者を正しいとしたように, 筆者も後者を採用したい (岡田 1974: 4)。
- 17) 『集史』トプカプ・サライ本 (JT/TS 1518) には, Mūtuqa Biki とあり, 語頭が M であるが, 大英図書館本 (JT/BL 16688) では, 語頭は Q であって, 上下の点は省かれているけれども, Qūtuqa Biki と読むことができ, Quduqa Beki にあたる。
- 18) 原文には, 「兄弟たち barādarān」とあるが, おそらくモンゴル語の「兄弟 aqa degü」の直訳である。aqa degü には, 広義の用法として, 祖先を共有する同じクランの成員を指す場合があり, この部分は, その意味と思われるので「一族」と訳しておく。
- 19) ジュムクルは, アバガ誕生の 1 ヶ月後に生まれた (JT/A3: 9)。アバガは 1234 年 2 月生まれであるので (Jackson 1982: 61), ジュムクルは 1234 年 3 月生まれであることになる。

20) もちろん、従来の婚姻理論においても、「父方交叉イトコ婚」が互酬性 (reciprocity) の原理をもつことは指摘されてきたが、筆者のように第1世代の婚姻の夫の立場からギブ・アンド・テイクを論ずることはなく、常に第2世代の婚姻の夫の立場から論じており、すなわち、父の姉妹が婚出したことのお返しとして父方交叉イトコを娶るという捉え方をしてきた。例えばレヴィ=ストロースは、「父方交叉イトコ婚」の互酬性について、次のように述べている。「自己の婚姻は上の世代で父が行なった父の姉妹の譲渡に対する見返りにすぎない。そして現状回復とでもいえる自己の婚姻によってこの取引はいわば終結するのである。」「貸付には常に返済が伴い、ある家族集団にとって損失となる結婚には、その見返りとして、その同じ集団に利益となる結婚が伴う。すなわち、父が譲渡して失った姉妹は、息子のために獲得される配偶者をもたらすのである」(レヴィ=ストロース 1978: 776-777)。

21) リーチ、ニーダムらの縁組理論のなかで、しばしば交叉イトコ婚について指摘されてきたことは、交叉イトコ婚とは、本当の交叉イトコとの婚姻だけを指すのではなく、交叉イトコを含むカテゴリーに属する女性と結婚することであると、これを「類別的交叉イトコ婚」と呼んできた(リーチ 1987: 85; ニーダム 1977: 17-19)。モンゴルの親族名称体系の中で、父方交叉イトコを含むカテゴリーは、ブリーランドが復元したモンゴル親族名称体系のプロトタイプによると jee (『元朝秘史』のジェエ je'e) であり (Vreeland 1954: 305-307, 334), jee は「自己の出自集団から婚出した女性の子供 (FFZC, FZC, ZC, DC, FBDC)」を指す。従って、jee には、父の父の姉妹の娘 (FFZD) も含まれ、オルガナとカラ・フレグとの婚姻は、夫のカラ・フレグから見れば、jee との婚姻であり、類別的な父方交叉イトコ婚であると解釈することもできる。

ブリーランドは、モンゴルのハルハ、チャハル、ダゴールの親族名称体系からプロトタイプを復元した上で、そのプロトタイプは、マードックの分類のうち、標準的なオマハ型にあたるとした (Vreeland 1954: 320)。オマハ型の特徴のひとつは、自己の父系集団から婚出する女性たちが同一視され、その子ども達を同一の用語で分類することであり (キージング 1982: 194-196)、その用語にあたるのが jee である。

22) 父方交叉イトコ婚は、「父の姉妹の娘との結婚」であるため、交換される女性の母親が誰であるかが問題となる。従って、一夫多妻婚が行なわれた場合、「父の姉妹の夫の別の妻の娘との結婚」のように、パターンは父方交叉イトコ婚に似ていても、夫と妻の系譜関係から見れば、父方交叉イトコ婚でない例が起こりうる。一方、母方交叉イトコ婚の場合は、「母の兄弟の娘との結婚」であるため、交換される女性の母親が誰であるかは問題にならない。

jee については注21参照。以下に『元朝秘史』の je'e の用例について、従来の解釈を整理しておきたい。『元朝秘史』では、je'e が okin (娘) と対句となって3回使われている。そのうちから、64節の用例を次に挙げておく。

我々ウンギラトの民は、昔の日よりジェエの容色、娘の顔色を持ち (je'e-yin jisün ökin-ü önggeten)、人々は争いませぬ。頬の美しい娘達を汝らのカアンになった者のために大きな車に乗せ黒いオス駱駝をつけて駆って行き、後の座に共に座らせませぬ、我々は。国の民は争いませぬ。(中略) 昔からウンギラトの民は、后という盾を持ち、娘という申し上げる言葉を持ち、ジェエの容色、娘の顔色によっているのです (je'e-yin jisün ökin-ü öngge-ber büle'e)、我々は。

従来の解釈としては、この *je'e* は、後に続く「娘 *ökin*」と対になっていることから、女性に限定して解釈することが多かった。その代表が、モスタールト説であり、「*je'e*（娘または姉妹の子供）は、ここでは「コンギラトの娘の娘」を意味しなければならない。彼女達は結婚させられ、そうすることによって、夫を彼女らの全親族の方へ向けるのである」と主張した（Mostaert 1950: 296）。一方、小沢重男氏は、たんに「女の子」の意味であると解釈した（小沢 1984: 261）。

それに対して、ブリーランドの復元したプロトタイプでは、*jee* は男女を双方を含むカテゴリーであり、自己の父系出自集団の女性の子供（FFZC, FZC, ZC, DC, FBDC）（Vreeland 1954: 305–307, 334）を意味する語彙である。この立場から『元朝秘史』の *je'e* を解釈したのがペーコンである。ペーコンは、モンゴル帝国時代のモンゴル族の生き残りとしてされる、アフガニスタンのハザラ族の親族名称体系に、*jee* に対応する *jei'a* があり、*jee* とほぼ同じ概念であることから、『元朝秘史』の *je'e* も、自己の父系出自集団の女性の子供と考えられるとした（Bacon 1958: 38, 118）。筆者も、モンゴル帝国時代の *je'e* に、ブリーランドのプロトタイプの *jee* の概念を適用することができると考えたい。

一方、ペリオは *je'e* を「娘の息子」と訳しており（Pelliot 1949b: 131）、男の意味にとっている。たしかに、この文章全体の意味を考えると、ウングラト族から婚出してカトンとなった *ökin* と、そのカトンから生まれた偉大な息子達の *je'e*、すなわちジョチ、チャガタイ、オゴデイ、トルイ、チンキム、マンガラ、ノムガン等を讃えた文であると思われるので、*je'e* 自体は男女双方を含むカテゴリーであるとしても、この文脈では、ペリオの解釈のように男の意味に重点をおいているようである。以上の解釈については、小長谷有紀氏より貴重なご教示をいただいた。

- 23) 史料Dの『集史』の記事によれば、トク・テムルが娶ったのはエメゲン（Emegen < Emkän）である。しかし、『五族譜』（SP/TS 2937）では、Ebükänとあり、ウイグル式文字でも *b* であることを確認でき、「エブゲン Ebügen」と読める。おそらく、すぐ後に出てくる「エメゲン・カトン」と混同したのであろう。
- 24) フレグが死去すると、このオルジェイは、フレグの息子のアバガと結婚した。
- 25) 『元朝秘史』の251節では Čügü güriġen（三回）と出てくるが、202節には Čigü güregenとある。従来から、『元史』の「赤窟」「赤駒」、『聖武親征録』の「赤渠」と一致する Čigü を正しいとするのが定説である。
- 26) トルイは1241年に56歳で死去したオゴデイより年下である。また、トルイの享年について『元史』に「四十有闕」（『元史』巻115、睿宗伝）とあることより、死去した1232年に、トルイは41歳以上であったことがわかり、オゴデイより年下であることから46歳以下であったことになる。この二つから、1213年にトルイは22歳以上、27歳以下となる。
- 27) チグが牧地を与えられた「チベット」（史料M・N）については、杉山正明氏が、『元史』巻60地理志に「西寧州」「元初為章吉駙馬分地」とあるチベットのAMD地方（現在の青海省一帯）に当たることを指摘されている。チンギス・カンが西寧を陥落するのは死去する直前の1227年であるので、杉山正明氏が解釈されたように、チグが4千戸とAMD地方の牧地を与えられたのは、チンギス・カンの治世の末年かオゴデイの治世初期と考えられる（杉山 1992: 153–154）。

ところで、『集史』部族編には「チンギス・カンは、他のウングラト諸族から4千人の男を分けて彼に委ね、自分の娘でトルイ・カンより年上のトマルンを彼に与え、彼をチベット

地方へ派遣した。現在まで彼らの子孫がそこに居る」(史料M)とあり、チンギス・カンの治世に、チグは4千戸を分与され、トマルンも娶ったかのようにみえるが、結婚の時期とチベットへの派遣・4千戸分与の時期を同じとは考えにくい。その点では、むしろ、両者を分けて記している次のチンギス・カン紀の記事の方が正確だと考えるべきであろう。

彼はアルチ・ノヤンの息子であり、(彼の)トマルン・カトンはチンギス・カンの娘である。この4千の軍隊をウングラトから分けて彼に与え、チベット方面へ派遣した。彼らはまだそこに住んでいる。(史料N)

なお、史料Mの「チベット」の原文は、フリー・ザーデの校訂本では、トプカブ・サライ本(JT/TS 1518)に基づいてTümawütとしてあり、チベットと取り難いが、やはり良写本の一つであるテヘランの国民議会付属図書館所蔵の写本(JT/KMSM 2131: fol. 31b)では、Tübātとある。史料Nでも「チベット Tabbat」とあるので、やはりチベットのことである。

- 28) チンギス・カンの息子たちは、かなり近い時期に結婚しているが、彼らの中でチンギス・カンの姻戚関係を継承したのは、この長子ジョチであった。また、前述したように、チンギス・カンが即位する3年前、ケレイトのオン・カンと政治的関係を強めるため、オン・カン家と二重の姻戚関係を結ぼうとしたとき、計画されたのは、やはりこの長子ジョチの縁組であった。このように、チンギス・カンが重要な政略結婚に組み込もうとしたのは長子ジョチであったことは、ジョチがチンギス・カンの後継者の第1候補であった可能性が推測させる。周知のように、ジョチには母親のボルテが略奪されていた期間に産まれたという出自の問題があるけれども、実際にジョチの帝位継承の可能性が絶たれたのは、ジョチがチンギス・カンより先に死去したからであった(宇野 1993: 74)。
- 29) マンジタイ(蠻子台)は、大徳十年三月(1306年)に鈔一万錠を賜り(『元史』巻21)、その後52歳で死去し、大徳十一年三月(1307年)に甥のディウバラがマンジタイの後を継いで万戸長になっているので(史料Q)、マンジタイは1306-07年に数え52歳で死去したことになり、従ってマンジタイの生年は、1255-56年である。
- 30) ナチンの名前が、1265(至元二)年に、クビライが中書省に発した次の聖旨に出てくるので、ナチンはその年まで生きていたことが確認される。

上都・北京・西京・隆興・平灤五路戸計、為有争差，至元二年，中書省欽奉聖旨「拋納陳(ナチン)駙馬・帖里干駙馬・頭輦哥国王・鍛真・忽都虎五投下戸計，仰差官与各投下頭目，各州県管民官，勾喚元主并驅戸。一同対証得，委係各人出軍時，馬後稍将来底人口，達達数目裏有可，分付本投下者。於當差額内除豁，如対証得。委係好投拜民戸，及在外投属，或本投下招收到底人戸，作民當差。」欽此。(上都・北京・西京・隆興・平灤の五路の戸計に争差があったため，至元二年に中書省が欽奉した聖旨に「納陳(ナチン)駙馬・帖里干駙馬・頭輦哥国王・鍛真・忽都虎の五投下の戸計については，仰いで官を差わし，各投下の頭目や各州県の管民官とともに，元主並びに驅戸を勾喚して一同に対証し，委係に各人が出軍した時に，馬後に稍めてきた人口で，達達の数目にあれば，本の投下に分付せよ。當差の額内より除豁する。如し対証したところ，委係に好んで投拜した民戸，及び外に在って投属したもの，あるいは本の投下が招収した人戸であれば，民として當差する。」とあり，此を欽んだ。)『通制條格』巻2；小林・岡本 1964: 13, 25)

- 31) 次の記事より、1269(至元六)年に、オロチンとナンギヤジンが、華北の分地の行政に着手しているの、このときすでに二人が結婚していたことが確認される。

至元六年、州人敬述遺命、請於斡羅眞(オロチン)駙馬・囊家眞(ナンギヤジン)公主。於是、乃追慕納陳(ナチン)駙馬遺訓、從州人之請奏。奉朝命、立鉅野縣事、且移置濟州總司。(「濟寧路總管府記碑」『道光鉅野縣志』卷20)

- 32) 史料Qに「無子」とあるのは男子がいなかったことを意味する。史料Uにあるように、オロチンにはシリンドリという娘がいた。オロチンの殺害については、クリーブス、杉山、村岡諸氏の論文参照(Cleaves 1950: 25, 97; 杉山 1983: 664; 村岡 1985: 320)。
- 33) ナンギヤジンの結婚については、史料間に齟齬がある。ナンギヤジンはオロチン、テムル、マンジタイの3人と結婚したが、『元史』卷118特薛禪伝(史料Q)は、テムルとの結婚を記さず、『元史』卷109諸公主表(史料R)は、オロチンとの結婚を記していない。また、「応昌府報恩寺碑」(『元文類』卷22)と「大元加封宏吉烈氏相哥八剌魯王元勳世德碑」(『道光鉅野縣志』卷20)はオロチン、マンジタイとの結婚を記さず(錢大昕『二十二史考異』卷93)、「勅賜應昌府罔極寺碑」(『中庵集』卷14)と「張氏先塋碑」(『滿州金石志』卷4; Cleaves 1950: 24, 97)と「濟寧路總管府記碑」(『道光鉅野縣志』卷20)は、テムル、マンジタイとの結婚を記していない。
- 34) 『元史』卷21の大徳七年十二月辛丑(1304年1月25日)の条に「賜皇姑魯國大長公主鈔一萬五千錠、幣帛各三百匹。」とあり、「皇姑魯國大長公主」とはナンギヤジンのことであるので、この時までには生きていたことがわかる。
- 35) 『元史』卷114は、ナムブイをナチンの孫の仙童の娘としているが、『集史』では、ナムブイはナチンの娘であり、『集史』の方が正しいことはすでに邵循正氏が指摘している(邵循正 1985: 6)。
- 36) 史料Wの『元史』后妃伝1に、「大徳三年十月、立為后。生皇子德壽、早薨。」と記され、シリンドリが成宗テムル即位後の大徳三(1299)年に后となり、德壽を産んだことになっているのは、全く事実と反している。

まず、錢大昕が指摘したように、シリンドリは成宗テムルの即位以前に死去しており、大徳三年十月に皇后となったのは、バヤウト族のブルガン・カトンである(『二十二史考異』卷93)。「元史」后妃表に「失憐答里元妃」とあるように、シリンドリの称号は「元妃(最初に娶った妃)」であったが、至大元(1308)年に宗廟の成宗テムルの室に祭られることになったとき、『元史』卷74祭祀志3に「追尊先元妃為皇后、祔成宗室」とあるように、初めて称号が「元妃」から「皇后」となったのであり、それ以前に后になっていたとは考えられないことも錢大昕説を支持している。

次に、シリンドリが德壽を産んだと記されている点も事実と反する。すでに韓儒林が明らかにしているように、次の『山居新話』の記事及び『輟耕録』卷5「僧有口才」の条には、德壽がブルガン・カトン(不魯罕皇后)の子として記されており、『元史』の記事と矛盾する(韓 1982: 83)。「輟耕録」の記事については野上俊静も言及している(野上 1978: 274-275, 283)。

膽巴師父者、河西僧也。大徳間朝廷事之、與帝師並駕。適德壽太子病痲而薨。不魯罕皇后遣使致言於師曰、「我夫婦、以師事汝至矣。止有一子。何不能保護耶。」師答曰、「佛法譬若燈

箆。風雨至，則可蔽，若爾燭盡，則燈箆亦無如之何也。」可謂善於應對。（『山居新話』）

大徳間、僧膽巴者、一時朝貴咸敬之。徳壽太子病瘵薨。不魯罕皇后遣人問曰、「我夫婦崇信佛法，以師事汝。止有一子。寧不能延其壽邪。」答曰、「佛法譬猶燈籠。風雨至，乃可蔽。若燭盡，則無如之何矣。」此語即吾儒死生有命之意。異端中得此。亦可謂有口才者矣。（『輟耕録』卷5）

一方、イルカン国で編纂されたペルシア語史料『集史』に、ブルガン・カトンには Tāshī Tāīshī という息子がいたと記されており、これを徳壽に比定したのは Blochet である (Blochet 1911: 584)。その後、韓儒林は、この『集史』の記事と『山居新話』『輟耕録』の記事が、徳壽をブルガン・カトンの子とする点で一致することから『元史』の記事が誤りであると結論した。『集史』よりも「徳壽」の音を正確に転写しているのは、『ワッサーフ史』第四巻である。『ワッサーフ史』第4巻の原本と言われているイスタンブルのヌール・オスマニエ所蔵の写本によると (TW/NO 3207: 176b)、ブルガン・カトンの息子は、Tishū あるいは Teishū (TYŠW) であることから、これが「徳壽」に当たることは確実である。

- 37) 『元史』巻29の泰定元年十月壬午 (1324年11月16日) の条に、「以魯國大長公主女適懷王」とあり、「魯國大長公主のむすめ」とはセンゲ・ラギの娘、すなわちブダンリを指し、「懷王」とはトク・テムルを指す。
- 38) 周知のように、従来の縁組理論においては、ニーダムが「規定な prescriptive 婚姻」「選好的な preferential 婚姻」という概念を設定して理論化を押し進め、「規定的父方交叉イトコ婚」は理論上も実際にも存在しないと結論した (Needham 1958)。当時のモンゴル社会全体を考えてみると、本稿で論じる縁組システムは、しなければならない婚姻として「規定」されていたわけではないので、「規定的な婚姻」ではない。また、好ましい婚姻として「選好」されていたといえなくもないが、むしろ、モンゴル帝国の王族であるチンギス・カン家が、特定の家系との間でのみ行なった特殊な政略結婚と考えるべきであろう。

リーチは、トロブリアンド島の事例について、デュモンは南インドの事例について、選好的な父方交叉イトコ婚が、首長の家系だけで行なわれることを論じた (Leach 1958: 138-139; Dumont 1957: 12-22; デュモン 1977: 167; Dumont 1983: 57)。その事例は、母系制社会の事例であり、父系制社会のチンギス・カン家の事例とは背景が異なるため、ただちには結びつかないが、政治的に重要な特定の家系だけで交換婚が行なわれた点は共通している。

- 39) 「母の兄弟と姉妹の息子の関係 (avunculate)」に関する人類学の議論については、石井氏の論文参照 (石井 1977)。
- 40) この母方の親族関係は、モンゴルの親族名称体系の中では、どのような関係を意味するのであろうか。ブリーランドが復元したモンゴル親族名称体系のプロトタイプによると、図23でいえば、ウとその兄弟姉妹からみて、Aの父とその兄弟姉妹、A・B・D・Eとその兄弟姉妹・イトコは nagč である。この nagč と裏返しの関係にあるカテゴリーが jee であり、Aの父とその兄弟姉妹、A・B・D・Eとその兄弟姉妹・イトコからみて、ウとその兄弟姉妹は jee である (Vreeland 1954: 305-307, 334)。この nagč, jee は、『元朝秘史』の nayaču, je'e にあたる。本文で述べた母方の親族関係とは、この je'e と nayaču の関係である。従って、「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる」という互酬の原理にもとづく通

婚パターンは、各世代毎に新たな $je'e=nayaču$ 関係を、反転を繰り返しながら生み出していくのだと言うこともできる。しかし、 $nayaču$ のカテゴリーが広いため、その逆は真ではない。つまり、 $je'e=nayaču$ 関係を各世代で再生産するために「妻の兄弟の息子にお返しとして自分の娘を嫁がせる」ことが必要だとは言えない。なぜなら、自分の娘でなく姪を嫁がせても $je'e=nayaču$ 関係を再生産できるからである。現在のところ、モンゴルの親族カテゴリーによって、この縁組システムを定義することは難しいように思える。

- 41) ただ、この解釈が完全に証明されるためには、センゲ・ブラとブナの結婚が、徳壽が死去した1306年1月3日（大徳九年十二月十八日）以前であることが立証されねばならない。この結婚の年月日については、成宗テムルの在世中ということ以上不明である。従ってここで述べた解釈は、証明しきれない部分を残している。

文 献

- 足利惇氏・田村実造・恵谷俊之
1968 『イランの歴史と言語』京都：京都大学。
- Bacon, Elizabeth E.
1958 *Obok: A Study of Social Structure in Eurasia*. New York: Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research.
- 白翠琴
1984 「幹亦刺貴族与成吉思汗系聯姻考述」『民族研究』第一期，46-59。
- Beatty, Andrew
1992 *Society and Exchange in Nias*. Oxford: Clarendon Press.
- Bloch, E. (ed.)
1991 *Djami el-Tévarikh: Histoire générale du monde par Fadl Allah Rashid ed-Din*. Leyden: E.J. Brill, London: Luzac & Co..
- Boyle, John Andrew
1971 *The Successors of Genghis Khan*. New York: Columbia University.
- Cleaves, Francis Woodman
1949 The Sino-Mongolian Inscription of 1362 in Memory of prince Hindu. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 12, 1-134.
1950 The Sino-Mongolian Inscription of 1335 in Memory of Chang Ying-jui. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 13, 1-131.
1951 The Sino-Mongolian Inscription of 1338 in Memory of Jigün-tei. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 14, 1-104+pls.16.
1982 *The Secret History of the Mongols*. Cambridge: Harvard University Press.
- Doerfer, Gerhard
1963 *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen*, vol. 1. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag GmbH.
- Dumont, Louis
1957 *Hierarchy and Alliance in South Indian Kinship*. London: Londres.
1983 *Affinity as a Value*. Chicago: The University of Chicago Press.
- デュモン, L.
1977 『社会人類学の二つの理論』渡辺公三訳，東京：弘文堂。(Dumont, L., 1971, *Introduction à deux théories d'anthropologie sociale*. The Hague: Mouton.)
- 福島伸介
1985 「12～13世紀のモンゴル社会における uruq について」『モンゴル研究』16, 31-47。
- 藤島建樹
1968 「元朝后妃の仏教信仰」『印度学仏教学研究』16(2), 309-313。

- Goody, Jack & Tambiah, S. T.
1974 *Bridewealth and Dowry*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hambis, Louis
1954 *Le chapitre CVIII du Yuan che*. Leiden: E. J. Brill.
- 韓儒林
1982 「西北地理札記」『穹廬集 元史及西北民族史研究』pp. 69-92, 上海: 上海人民出版社。(原載: 『華西大学中国文化研究所集刊』一卷三期, 1941年。)
- 石井真夫
1977 「母方のオジをめぐる親族慣行」『社会人類学年報』3, 127-156。
- 磯野富士子
1985 「アンダ考」『東洋学報』67(1・2), 57-80。
- Jackson, Peter
1982 ABAQA. Ehsan Yarshater (ed.), *Encyclopaedia Iranica*, vol. 1, fas. 1, London: Routledge and Kegan Paul.
- ケージング, M. R.
1982 『親族集団と社会構造』小川正恭ほか訳, 東京: 未来社。(Keesing, M. Roger, 1975, *Kin Groups and Social Structure*. New York: Holt, Rinehart and Winston.)
- 小林高四郎・岡本敬二編
1964 『通制条格の研究訳註』第一冊, 東京: 中国刑法志研究会。
- Leach, E. R.
1958 Concerning Trobriand Clans and the Kinship Category Tabu. J. Goody (ed.), *The Developmental Cycle in Domestic Groups*, pp. 120-145. Cambridge: Cambridge University Press.
- リーチ, E. R.
1974 『人類学再考』青木保ほか訳, 東京: 思索社。(Leach, Edmund Ronald, 1961, *Rethinking Anthropology*. London: The Athlone Press.)
1987 『高地ビルマの政治体系』関本照夫訳, 東京: 弘文堂。(Leach, E. R., 1954, *Political Systems of Highland Burma*. London: G. Bell & Sons.)
- レヴィ=ストロース, C.
1977 『親族の基本構造』上巻, 馬淵東一他訳, 東京: 番町書房。
1978 『親族の基本構造』下巻, 馬淵東一他訳, 東京: 番町書房。(Lévi-Strauss, C., 1967, *Les structures élémentaire de la parenté* (deuxième édition). Paris: Mouton.)
- レヴィ=ストロース, C.・エリボン, D.
1991 『遠近の回想』竹内信夫訳, 東京: みすず書房。(Lévi-Strauss, C. et Eribon, D., 1988, *De près et de lion*. Paris: ditons Odele Jacob.)
- Mckinnon, Susan
1991 *From a Shattered Sun: Hierarchy, Gender, and Alliance in the Tanimbar Islands*. Madison: The University of Wisconsin Press.
- Mostaert, Antoine
1950 Sur quelques passages de l'Histoire secrète des Mongols (1). *Harvard Journal of Asiatic Studies* 13, 285-361.
- 村岡 倫
1985 「シリギの乱」『東洋史苑』24・25, 307-344。
- 村上正二
1964a 「モンゴル部族の族祖伝承 (1)」『史学雑誌』73(7), 1-34。
1964b 「モンゴル部族の族祖伝承 (2)」『史学雑誌』73(8), 36-64。
1970 『モンゴル秘史 1』東洋文庫 163, 東京: 平凡社。
1972 『モンゴル秘史 2』東洋文庫 209, 東京: 平凡社。
- 那珂通世
1907 『成吉思汗実録』東京: 大日本図書。
1915 「成吉思汗実録続編」『那珂通世遺書』pp. 1-152, 東京: 大日本図書。
- 拿木四来 (Namsarai)
1989 「モンゴル人の親族語彙について」『日本モンゴル学会紀要』19, 115-124。

Needham, Rodney

1958 *The Formal Analysis of Prescriptive Patrilineal Cross-Cousin Marriage, Southwestern Journal of Anthropology* 14, 199-219.

ニーダム, ロドニー

1977 『構造と感情』江口暁子訳, 東京: 弘文堂。(Needham, R., 1962, *Structure and Sentiment: A Test Case in Social Anthropology*. Chicago: University of Chicago Press.)

野上俊静

1978 『元史釋老傳の研究』京都: 朋友書店。

岡田英弘

1974 「ドルベン・オイラトの起源」『史学雑誌』83(6), 1-43。

1981 「モンゴルの統一」護 雅夫・神田信夫編『北アジア史(新版)』pp. 135-182, 東京: 山川出版社。

1985 「元朝秘史の成立」『東洋学報』66(1・2・3・4), 157-177。

小沢重男

1984-90 『元朝秘史全訳』全6巻, 東京: 風間書房。

Pelliot, Paul

1949a *Notes sur l'histoire de la Horde d'Or*. Paris: Adrien-Maisonneuve.

1949b *Histoire secrète des Mongols*. Paris: Librairie d'Amérique et d'Orient.

1963 *Notes on Marco Polo* vol. 2. Paris: Imprimerie nationale.

1973 Mār Ya(h) ballähâ, Rabban Sāsūmâ et les princes Öngüt chrétiens. *Recherches sur les chrétiens d'Asie centrale et d'Extrême-Orient*, pp. 237-288. Paris: Imprimerie nationale.

de Rachewiltz, Igor

1972 *Index to the Secret History of the Mongols*. Bloomington: Indiana University.

佐口 透

1943 「モンゴル人支配時代のウイグリスタン(下)」『史学雑誌』54(9), 72-97。

邵循正

1985 「《元史》, 刺失德丁《集史・蒙古帝室世系》所記世祖后妃考」『邵循正歴史論文集』pp. 1-7, 北京: 北京大学出版社。(原載: 『清華学報』1936年。)

志茂碩敏

1983 「イル汗国史上におけるフラグ家姻戚の有力諸部族」護 雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』pp. 667-695, 東京: 山川出版社。

1995 『モンゴル帝国史研究序説』東京: 東京大学出版会。

杉山正明

1982 「クビライ政権と東方三王家」『東方学報』54, 257-315。

1983 「ふたつのチャガタイ家」小野和子編『明清時代の政治と社会』pp. 651-700, 京都: 京都大学人文科学研究所。

1984 「クビライと大都」梅原 郁編『中国近世の都市と文化』pp. 485-518, 京都: 京都大学人文科学研究所。

1992 『大モンゴルの世界』東京: 角川書店。

1995 「大元ウルスの三大王国——カイジャンの奪権とその前後(上)」『京都大学文学部研究紀要』34, 92-150。

1996 『モンゴル帝国の興亡(下)』(講談社現代親書1307), 東京: 講談社。

宇野伸浩

1985 「ホイン・イルゲン考——モンゴル帝国・元朝期の森林諸部族」『文学研究科紀要(早稲田大学大学院文学研究科哲学・史学編)』別冊12, 173-186。

1993 「チンギス・カン家の通婚関係の変遷」『東洋史研究』52(3), 69-104。

1995 「遼朝皇族の通婚関係にみられる交換婚——太祖時代から聖宗時代まで——」『史滴』17, 34-54。

1997a 「遼朝皇族の通婚関係にみられる交換婚——興宗時代から道宗時代まで——」『東方学会創立五十周年記念東方学論集』pp. 193-208, 東京: 東方学会。

1997b 「遊牧国家の王族の婚姻」『文明のクロスロード Museum Kyushu』58, 18-24。

Vreeland, Herbert Harold

1954 *Mongol Community and Kinship Structure*. New Haven: Human Relations Area Files.

蕭啓慶

1983 「元麗關係中的王室婚姻與強權政治」『元代史新探』pp. 231-262, 台北: 新文豐出版公司。(原載: 中華民國韓國研究学会編『中韓關係史國際研討會論文集』台北。)

箭内互

1930 「元代の東蒙古」『蒙古史研究』pp. 585-661, 東京: 刀江書院。(原載: 『滿鮮地理歴史研究報告』6, 1920年。)

《史料略号》

『集史』(部族編は主としてアリー・ザーデの校訂本を利用し、他の箇所は以下の写本を利用した。)

JT/A1: A. A. Али-заде (ed.), Фазлаллах Рашид ад-Дин, *Джами' ат-Таварих*, Том I, Част I, Москва, 1965.

JT/A3: A. A. Али-заде (ed.), Арендс (tr.), Фазлаллах Рашид ад-Дин, *Джами' ат-Таварих*, Том II, Баку, 1957.

JT/BL 16688: Rashid al-Din, *Jāmi' al-Tawārīkh*, MSS. British Library, Or. Add. 16688.

JT/BL 7628: Rashid al-Din, *Jāmi' al-Tawārīkh*, MSS. British Library, Or. Add. 7628.

JT/KMSM 2131: Rashid al-Din, *Jāmi' al-Tawārīkh*, MSS. Kitābkhāna-ye Majlis-i Shūrā-yi Millī, 2131. (足利・田村・恵谷 1968 所収)。

JT/Saltykov: Rashid al-Din, *Jāmi' al-Tawārīkh*, MSS. Saltykov Shchedrin, 2458.

JT/TS 1518: Rashid al-Din, *Jāmi' al-Tawārīkh*, MSS. Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Rewan kosku 1518.

『ワッサーフ史』

TW/NO 3207: Shihāb al-Din 'Abd-Allāh Sharaf Shirāzī, *Tārīkh-i Waṣṣāf*, MSS. Nuru Osumaniye 3207.

TW/TS 3040: Shihāb al-Din 'Abd-Allāh Sharaf Shirāzī, *Tārīkh-i Waṣṣāf*, MSS. Topkapı Sarayı Müzesi, A. 3040.

『五族譜』

SP/TS 2937: *Shu'ab-i Panjāna*, MSS. Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Ahmet III 2937.